アビス?:PROJECT・UNKNOWN

如月 晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アビス？：ＰＲＯＪＥＣＴ・ＵＮＫＮＯＷＮ

【Ｎコード】
Ｎ６１９１Ｗ

【作者名】
如月　晃

【あらすじ】
クトゥルフ事変から三年。
世界はクトゥルフに支配された未来の生物「アビス」による脅威と被害を味わい、未来の扉「虚数次元」に関連する事件・被害は人類の総力で対処するという国連が定めた「水神条約」により元のレベルに復興した。
また、水神条約により必要の無くなったＣＡＴＳは解散、虚数次元

も現れなくなり、世界はアビスの脅威から曝されなくなった。

だが、平和はいつも突如として崩される。

４月１日、東京上空に巨大な虚数次元が発生、そこから巨大な飛行物体が現れる。

それは全人類と未来からやってきた人間達との世界を巻き込んだ第三次世界大戦の幕開けだった……

クトゥルフを倒し、ＣＡＴＳを退役した桐生翼

クトゥルフに攻撃を加えたエルボー隊を立て直した佐伯玲志

東京タワーを使いクトゥルフを殲滅しようとし、特殊作戦群から外された吉良沢准

桐生の武勇伝に憧れて陸上自衛隊に入隊した浅香梗也

突如として武器を持つ事となった学生の如月裕紀

彼ら五人の視点から描かれる群像戦記

クトゥルフ事変

三年前、人類は地獄（アビス）を見た。
俺は防衛省に呼び出され、ＣＡＴＳと呼ばれる特殊生物「アビス」を処理する非正規特殊部隊に配属された。
それは運命かと言われたら、どう答えればいいか分からない。
何処からがクトゥルフ事変で、何が始まりのきっかけかは個々の判断に委ねられるからだ。
俺がその舞台に引き出された事が始まりなら、それは終わりの始まりなのか？
結局、いくら議論してもそれは偶然か必然か、運命か偶然かなんてそんな物は人の理解を遥かに越える事柄で答えなどは無い。
ただ、俺は自分が思ったように生きるだけだ。
預言や未来なんて物も、結局は今に生きる俺達「命」の様々な分岐の帰結に過ぎないのだから……
それを俺達人類はクトゥルフに勝つ事で証明した。
だが、結局その分岐が破滅に向かっていたら……
その時、俺は最後まで足掻くだろう。
足掻いて、足掻いて、最期の時まで足掻いて、勝利を勝ち取ろうとするだろう。
それが、俺なのだから……

三年後

３月３１日
鬼無神社
０５：３４

白む青空と澄んだ空気。
春の穏やかな日和の中、神社の賽銭箱に罰当たりながら腰掛けた桐(きり)生翼(ゆうつばさ)は空を眺めた。
彼は陸上自衛隊が極秘裏に設置した非正規特殊部隊「特殊生物殲滅隊」、通称「ＣＡＴＳ」の特殊部隊「実動殲滅隊」の元隊員であり、クトゥルフを倒して世界を破滅から救った英雄であった。
クトゥルフ事変から僅かに三年。
毎日死と隣り合わせの任務を行う毎日とは打って変わって、今では楽しい毎日を送っている。
神主の正装の襟を整えた翼は切れ長の目を細め、空を見上げた。
その時、目の前に手の覆いが被せられる。
「誰でしょう？」
溌剌としたその声に翼は頬を緩ませながら「笑えねぇぜ？望」と笑いかけた。
「笑ってるじゃないですか、あなた」
旧姓椎名望(しいなのぞみ)は手の覆いを取ると大きめの胸を張る。
彼女もＣＡＴＳの実殲隊に所属していた隊員であり、かつては言い合ったりしていたが、困難な任務を重ねるごとに絆を深めた。
さらに翼の母親が死んで意気消沈していた幼い日、それを立ち直らせる言葉を言ったのは望だった。
『弱音を吐いちゃ駄目、諦めても駄目。頑張れば出来るから、笑えなくても笑って』
この言葉が翼の心に掛かった鍵を解き、明るい性格にしたのだ。

無論、翼の口癖である「笑えねぇ」は彼女の言葉の影響である。
切っても切れないそれは運命の赤い糸という言葉が良く当て嵌まる。
決定的だったのが、忌まわしきクトゥルフ事変だった。
彼女はカルト教団に捕まり、クトゥルフの体内に取り込まれたが、
それを翼が救い、望は助け出されてクトゥルフは倒された。
お互いに助け合い、惹かれた結果だ。
「どうした？休日なんだし、俺が飯作るから寝てろよ」
「目が覚めてしまって……だから外を掃こうと思ったんです」
柔らかい笑みを見せた望は壁に立てかけていた箒を掴んだ。
わざわざ、翼の目を隠す為に立てかけたかと思うと翼に笑いが込み上げ、ついつい吹き出してしまう。
「どうしたんですか？」
「いやぁ、相変わらず可愛いなってさ」
望は翼の言葉に耳まで赤くなると手足を同じタイミングで出しながら鳥居まで歩き、ぎこちない様子で石段を掃く。
翼はそんな滑稽な様子を見て、微笑むと大きな声で言った
「飯作ってくるな」
「分かりました」
まだ顔を赤くしている望は声を震わせながら答える。
それを見た翼は再び笑うと家の中に入った。
すると、玄関の前には浴衣姿の男性がこちらを見下ろすように立っている。
「何だ、ジェイク。起きたのか」
「……お前らが煩くて起きた」
銀髪のロングヘアに端麗な顔立ちの日本人離れした青い瞳のジェイク・サイファーは嘆息を漏らす。
彼も同じ部隊の隊員だったが、彼は少し特異だった。
魔術師。
彼は魔女狩りから逃れた先祖を持ち、彼自身も魔術を使える。
また、母親がクトゥルフの生贄となり、死んだという因縁がある為、

クトゥルフを崇拝する教団を追っていた。
最終的に翼達の協力を得て教団を倒し、クトゥルフ撃破に貢献したのだ。
今は鬼無神社で占いをしながら居候中である。
その占いは当たると評判で女子高生は勿論、政界の人さえ来る程だ。
もっとも、魔術を使っている為当たるのだが……
ジェイクは頭を掻くと諦めたような笑みを見せた。
「……お前らに倦怠期は無縁だろうな」
「どういう事だよ！」
「……そのまんまだ」
ジェイクはフッと笑うと手をひらひら動かし、嘯いた。
「……いつまで幸せか楽しみだ」
「何だよ、そりゃ？占いか？」
「……いいや。違う」
「お前は変わったよな」
「あ？」と素っ頓狂な声をジェイクが漏らすと翼は先程ジェイクがやったようにひらひら動かし、嘯く。
「お前、俺と最初に会った時に本気で殺そうとしたのに、今じゃ冗談言い合う仲だぜ？それこそ、笑えねぇだろ？」
「……母親の仇を取る事が出来たから、肩の荷が降りたのかもしれないな」
ジェイクはそう言うと、家の奥に入って行きながら呟いた。
「……早く朝食を作れ」
「居候の分際で……分かってるよ」
翼は靴を脱ぐと台所に歩いていった。
笑みを湛えたその顔は幸せそのものだ。
「さて、適当に作りますか」
翼は包丁を器用に回し、曲芸のように掴んだ。
それが彼らにとっての幸せな日常だった。

双子

時計が7時を回った頃。
翼は食べ終えた食器を片付けていると足元に軽い衝撃が走った。
翼が足元を見ると2、3歳程の男の子と女の子が翼の足に抱き着いている。
「お父さん、遊ぼうよ」
双子の兄「翔(かける)」が翼を見上げながら無邪気な笑顔を見せている。
「お父さんは今忙しいからな。お母さんに遊んでもらいな」
「お母さんが、忙しいからお父さんに遊んでもらいなさいって言ってたもん」
双子の妹の「叶(かなえ)」が頬を膨らませながら翼に指を差す。
「指を差すな、指を」
翼は苦笑いを浮かべると、「ジェイクおじちゃんは?」と繋げ、身震いした。
子供にジェイクと言う訳にもいかず、「おじちゃん」と付けなければいけない事情に翼はいつも身震いを覚える。
「おじちゃんはお店出すので忙しいって言ってた」
翔は口を尖らせ、つまらなそうに呟いた。
昨日と今日は近くの神社で行われる会合の為、翼の父親「飛鷹(ひだか)」はいない。
今日は家事は翼の担当で、それが終わったら趣味である改造拳銃の調整を行う予定なのだが、ここで遊ぶとしばらく出来ない。
プライベートを取るか、子供を取るか、それが問題だ。
「あ〜……」
「「ねぇねぇ!」」
翼の服の裾を掴み、見上げる子供達。
翼の頭の中で天秤が現れ、銃と子供を秤にかける。
無論、勝負は決まっていた。

「仕方ないか……食器を洗ったら遊んでやるよ」
「やったー！じゃあ、お話聞かせて！」
翔の声に翼は笑顔で答えると叶が嬉しそうに口を開いた。
「じゃあ、じゃあ！お母さんとの馴れ初め教えて！」
その声に翼は顔を引き攣らせて食器を洗う手を止めた。
何処で馴れ初めなんて言葉覚えたんだよ！？
翼は込み上げる怒りと憤りを抑えつつ、作り笑いを見せてキラキラと目を輝かせる我が子に問い掛けた。
「馴れ初めって言葉、誰に教わった？」
「「ジェイクおじちゃん！」」
あの野郎……！
余計な言葉を教えやがって……！！
教えたら望に殺されるっての！！
こめかみに青筋全開ながら笑顔を見せる翼は二人の頭を優しく撫でながら同じ目線で語りかける。
「あのな？馴れ初めってのは大人しか聞いちゃいけないんだぜ？」
「「え～」」
二人はつまらなそうに口を尖らせる。
「他のお話ならいいぞ？」
「ん～」
叶が困ったような顔で首を傾げていると翔が満面の笑みで口を開いた。
「じゃあ、お父さんの武勇伝！」
「……その武勇伝ってのもジェイクおじちゃん？」
「うん！」
取り敢えず、あとであいつの座る椅子に画鋲でも置いてやる。
翼はさらさらの髪を掻き上げ、再び洗剤の香りのするシンクに立つ。
余計な事を教えやがって……
笑えねぇ……

青年達

東京都某所
能咸(のみな)高校
０８：１４

誰もいない静かな学校。
東京には珍しい木の学校は心地の良い香りがする。
木の学校と言ってもそれは昔の旧校舎といった物ではなく、真新しい物だ。
その学校の玄関に手をかけた１７０ｃｍ後半で黒髪のセミショートの青年は深い嘆息を漏らす。
街中を歩けば女性が二度見するような整った顔立ちに二重のぱっちりした目の青年は嘆息を漏らしてもよく映える。
沢山の下駄箱が並ぶその一つを開けた青年は内靴を掴んだ。
それを無造作に落とした青年は先程の衝撃で解けた靴紐を結び直し、廊下に出てすぐ隣の階段を駆け上がり、目の前の職員室に入った。
コーヒーの香ばしい匂いとパソコンの加熱した部品の匂いが混ざり合った独特の匂いは非常に不快で、憂鬱だ。
「如月裕紀(きさらぎゆうき)、来ました」
裕紀は無表情に、声高に言うと担任教師が駆け寄ってきた。
「如月君、おはよう。進学補習な来たんだよね？」
「……はい」
「じゃあ、教室を開けておいてね？」
裕紀は担任のコーヒー臭い口臭に顔をしかめた。
いつも思うが、何故こんなにコーヒーを飲むんだ？
ただでさえ激務の教師が大量のコーヒーを飲んだら胃を壊すだろうに……
裕紀はそれを口に出したい衝動を抑えつつ一礼して職員室を後にす

る。
職員室を出てすぐ右を曲がり、廊下を歩いて行くと補習が行われる教室だ。
その教室の前には耳が少し隠れる程度のショートヘア綺麗な顔立ち青年ともう一人は紅いセミロングの髪に中性的な顔立ちで少女のような顔立ちの青年が立っていた。
「裕紀、おはよう」
整った顔立ちの青年ーーー黒木晃(くろきあきら)は白い歯を見せながら笑った。
鍵くらい早く学校に来たなら取りに行けと毒づきたかったが、裕紀は口には出さない。
「おはよう」
裕紀は笑みを見せる。
すると中性的な顔立ちの青年ーーー芹沢咲也(せりざわさくや)が「ありがとうね」と言って、裕紀の肩をポンと叩く。
どちらかと言えば捻くれた性格の咲也のありがとうは正直聞いてて何か企んでいるのではと疑ってしまう。
そういう自分も捻くれていると自嘲した裕紀は鍵を開けた。
一番に教室に入った裕紀は教卓に鍵を置くと正面の一番前の席に座る。
同時に二人の少女が教室に入ってきた。
「皆、おっはよ〜！」
黒髪をポニーテールで後ろに纏め、どちらかと言えば体育会系の、元気も器量も良い少女が三人に挨拶した。
「春香は朝から元気いいな」
裕紀が苦笑すると荻野春香(おぎのはるか)が豪快に笑った。
「当たり前よ！こんな休日返上の補習なんてテンション上げなきゃやっていけないって！」
春香が晃の隣の席に座りながら笑って見せる。
「一応、先生方も私達の事を考えているのですから真面目に受けましょう？」

墨を流したような美しい黒髪のロングヘアに、刧やかでいい所のお嬢さんのような顔の少女が人差し指を立てて、小学生に教えるような口調の少女が春香を諌める。
「千尋は逆に真面目なんだな」
晃の笑い声に神崎千尋（かんざきちひろ）が「当然です」と言い、続けた。
「そもそも他の人が来ない事がおかしいですから」
千尋は周りを見渡しながらがらんとした教室に嘆息を漏らす。
「結局、俺達だけなんだもんな」
「腐れ縁ってやつだね」
咲也は笑いを噛み殺したように呟く。
この五人は小学校からの付き合いで咲也が虐められていたのを四人が助けたのがきっかけだ。
咲也はクォーターで、日本人離れした髪と顔立ちが小学生には面白かったらしく、恰好の対象だった。
それを庇ったのがこの四人でそれからの付き合いだ。
「そういえばさ」と切り出したのは晃だ。
「三年前のあの事件、あったじゃん？」
「クトゥルフ事変？」
「それ！」
千尋の答えに晃が指差した。
何か覚えていないのに話を切り出すのが晃の悪い癖だ。
「ふと思ったんだけど、そのクトゥルフ倒したのって、一人の男性なんだよな？」
「って、事になってるよな。どこまで本当かは分からないけどさ」
「そうだね。だいたい兵器が通用しない相手に刀で勝つってファンタジーじゃないんだからね。僕は尾鰭がついたデマだと思うけどね」
「そういう物かな？ウチはそういうの憧れるけどなぁ」
「私もそうですね。実際にいたらかっこよさそうですから」
春香と千尋は少しうっとりしているように見える。
「やっぱり女の子はそういうのに憧れるものか？」

「別にそういう訳じゃないけど、ロマンがあっていいじゃない？」
「ロマンねぇ……」
裕紀が小さく呟いたその時、補習担当の先生が入ってきてその話は終わった。

特殊科

陸上自衛隊某特殊科演習場
１０：２１

泥臭い匂い。
手の上をはいずり回る百足。
脂汗で顔に塗ったフェイスペイントが薄くだが剥がれた。
溢れ出て来る脂汗がペイント弾仕様の６４式小銃のグリップがじっとり濡れる。
ペイント弾はグレイザー・セイフティ・スラグと呼ばれるハンドガンの鳥撃ち用の散弾を参考にライフル弾とした物で、ライフル弾の無色火薬を減らして、被甲をプラスチックに、その内部に着色料を入れた物だ。
無論、精度も落ちるが安全性の面から考えれば当然の事である。
陸上自衛隊の特殊科候補隊員である浅香梗也（あさかきょうや）陸士長は長い待ち伏せ（アンブッシュ）を続けていた。
クトゥルフ事変以降に創設された陸上自衛隊の特殊作戦群の隊員を直接選抜する為の科だ。
クトゥルフ事変でその解決に尽力した桐生翼。
彼と同等か、それを越えるであろう才能を持った人物を見つけ出すのが目的の科であるが、その選抜方法は苛酷だった。
最初は４８時間の不眠不休の訓練。
まずはその段階で桐生翼にただ盲信的な者を篩にかけられて落とされる。
次にイギリス陸軍特殊部隊「ＳＡＳ」のＣＱＢ（近接戦闘）の訓練を行うキリング・ハウスに似た訓練が行われ、それをパスした者のみ、最後の訓練を行える。
その最後の訓練という物が今、浅香が行っている訓練だ。

７２時間を通して森林で行われるこのサバイバル訓練はルールは単純で７２時間生き残る、それだけである。
それなら単に隠れていればいいがそう簡単ではない。
それには教官も参加しており、武器に埋め込まれた発信機が定期的に教官達に送信されＧＰＳに表示され、結果、教官達に排除されて失格となる。
さらにその任務を困難にしているのは糧食が一食分しかないという事だ。
節約して食べるには少な過ぎる為、他の隊員を倒して奪わなければいけない。
その苛酷な任務をクリア出来たのは歴代で１人。
その人物は今教官をしており、この訓練に参加している。
浅香は長い間泥を被って待ち伏せをしていた。
その甲斐あって、既に彼は三人を倒している。
上々の結果だが、生き残らなければ意味は無い。
かれこれ２４時間が過ぎたものの、その三人分の糧食で何とかなりそうだと浅香は微かに笑う。
その時、前方１００メートルの茂みが揺れ、浅香は笑みを消す。
下手をすれば教官かもしれない。
という事は居場所がバレている可能性がある。
だが、正面からという事は勝機がある！
浅香は確実に仕留める為にフルオートに変えて正面に銃口を向けた。
現れたのは案の定、教官だった。
教官は印として使用している武器が８９式小銃であり、腕章には特殊作戦き章が付けられている。
間違いない。
浅香はゆっくり頷くと伏せ撃ちで教官を狙い撃った。
ばらばらに弾丸が放たれるが、銃声に気付いた教官が素早く近くの木の影に隠れる。
破裂したペイント弾が木に付着した。

同時に２０発の箱型弾倉が空になる。
浅香は舌打ちするとレッグホルスターから自衛隊正式採用拳銃「９ｍｍ拳銃」こと「ＳＩＧ　Ｐ２２０」を立ち上がりながら構えた。
口の中に汗と泥が混じった液体が流れ込んでくる。
その不快な味の液体を吐き出すと向こうから教官が浅香の「ＳＩＧ　Ｐ２２０」の後継拳銃「ＳＩＧ　Ｐ２２６」を構えながら突っ込んできた。
浅香が一瞬怯んだが１００メートル有るのだから余裕がある。
浅香は冷静に狙いを付けて引き金を引いた。
しかし、弾丸は跳ね上がりで逸れて教官には当たらない。
続けて弾丸を撃ち込むが一発も当たらない。
そうこうしている内に教官が迫ってくる。
浅香は急いで再装填を試みるが焦りと緊張で手が震えて上手く装填出来ない。
浅香が装填し終えた時には教官はすぐ目の前まで迫っていた。
身構えるより早く浅香の腕の間に教官の腕が潜り込み、それを浅香が認識した時には体が一回転していた。
宙返りよりも不安定な状況に浅香が恐怖した瞬間には既に体が地面に落ちていた。
突き抜ける痛みに息が出来ない浅香に教官は情け容赦無くＳＩＧＰ２２６のペイント弾を４発叩き込んだ。
浅香が負けた事を認識してから初めて教官の顔をじっくり見て、さらに体を強張らせた。
この訓練を唯一パスした教官だ。
教官―――吉良沢准（きらさわじゅん）はホルスターに拳銃を仕舞うと横たわる浅香を見下ろしながら口を開く。
「狙撃はセミオートで行うものだ。それに１００メートルの距離を拳銃で狙えると思うな、浅香士長」
鋭い眼光は蛇のようで、まるでこちらはそれに狙われる蛙になった錯覚に陥ってしまう。

それほどに吉良沢の威圧感は凄かった。
「貴様が最後の一人か」
その声を聞いた浅香は一瞬素っ頓狂な声を漏らすと今更多数の人に周りを取り囲まれている事に気付く。
「じゃあ、自分が？」
浅香の期待を込めた眼差しを一心に受けた吉良沢は微かに頬を緩めるとゆっくり頷いた。
「ああ」
その返事を聞いた浅香は確信した。
自分が特殊作戦群になれる。
しかし、それは浅香の期待を大きく裏切った。
「普通科だ」
「えっ？」
浅香は思わず聞き返した。
「普通科なら訓練すれば貴様でもいずれ特殊作戦群になれる」
浅香の中で何かが崩れた。
自分はクトゥルフ事変を終息させた男に近付きたい為に厳しい訓練に耐えたのに……
「何でですか！？」
浅香の叫び声を見透かしていたかのように吉良沢が口を開いた。
「我々は桐生翼を目指している奴は取らない。ただ即戦力になる奴だけが特殊作戦群になれる。それに貴様は履き違えている」
浅香は眉を潜めると吉良沢は鼻で笑った。
「72時間生き残る事が目的だ。敵を多く殺す事ではない」
吉良沢はそう言うと、歩き出して行ってしまった。

特殊科用の更衣室に入った吉良沢は深い溜息を漏らした。
特殊作戦群……
元々いた対テロ特殊部隊だ。
ＣＡＴＳの前進である未確認生物処理隊の過程で分かれた部隊。
自分はかつてはその部隊にいたが、クトゥルフ事変の際に東京タワーを用いてクトゥルフを殲滅しようという破天荒な作戦を決行して成功するも、クトゥルフを倒せなかった。
後に桐生翼がクトゥルフを倒し、　自分はその東京タワー破壊の罪で特特殊作戦群から危険人物として外されたのだ。
だが、東京タワーを破壊してクトゥルフを倒せていたら、奴らはきらびやかな賛辞を贈ったのだろうか？
狸供が……
だが、この仕事に執着する自分も自分だと自嘲する。
特殊作戦群から外された後に特殊科の訓練を受けて再び特殊作戦群に戻ったのだから。
「お疲れ様っス」
その声に吉良沢は後ろを振り返った。
扉には柔和な顔立ちで糸目、少し痩せ型の男性が立っている。
顔にはまだ
「大野准尉か」
吉良沢は大野賢治（おおのけんじ）准陸尉を見ると流し台に向かい、蛇口を捻った。
「今回も合格者は無しっスね」
「そういうもんだ。お前の心酔している桐生のような人物がそうそう現れる訳ではないだろ？」
そう言うと、吉良沢は手で水を掬い上げて顔に付けて擦った。
フェイスペイントで汚れた水が排水溝に流れていく。
「そもそも即戦力を探す為の部隊なんだから普通科から選抜して訓練させればいいと思うっスけど……」
「才能のある者を教育するというのが本命の科なのだから仕方ない。

そんな事は効率が悪いが、桐生の代替品に成り得る人物を喉から手が出る程欲しいのだろうな」
代替品という言葉に眉を潜め、眉間にシワを寄せた大野は皮肉混じりに言った。
「……兄貴の代替品に成り得る人物なんていないっスよ。吉良沢一尉がよく分かってるんじゃないっスか？」
一瞬、反論の言葉を予想した大野に、吉良沢は濡れた顔を向けて笑いかけた。
「その通りだ。だが、必ず奴を越える者は出てくるだろう？」
吉良沢はそう言うと、大野の言葉を遮るように彼の肩を叩いた。
「それもまた事実だからな」
吉良沢はそう言うとロッカーを開けてそこで話は終わった。

百里基地にて

百里基地
１７：３１

滑走路に響き渡る轟音とタイヤが地面と擦れる音。
三年前にクトゥルフ攻撃を行ったＦ－１５ＪＡが滑走路に降り立った。
マグダネル・ダグラス社　（現ボーイング社）が開発した最も有名で戦闘機型として最もポピュラーなタイプの戦闘機「Ｆ－１５　イーグル」、そのＣ型を日本独自型として発展させた航空自衛隊主力要撃戦闘機「Ｆ－１５Ｊ」。
その発展改良型がこの次期要撃戦闘機候補としてトライアル中の「Ｆ－１５ＪＡ　サベージイーグル（獰猛な鷲）」である。
サベージイーグルは例えるならＦ－２２ＡラプターとＦ－１５Ｅストライクイーグルを足した性能である。
三年前のクトゥルフ事変で使われた機体は完全焦土破壊兵器「ネイルアンカー」を胴体下面に取り付け使用する為に通常のＦ－１５Ｃ型では行えない切り離しを行える以外は対した調整は行われていなかった。
しかし、今回新たに改良されたＦ－１５ＪＡ　サベージイーグルはレーダーに世界最強とも言えるＦ－２２ＡラプターのレーダーＦＣＳ「ＡＮ／ＡＰＧ－７７」が搭載されている。
つまり、Ｆ－２２Ａの特性である高い探知能力と多目標交戦能力を有しているという事だ。
約２５０ｋｍを探知出来、さらに早期警戒機やイージス艦等の様々な情報をリンク出来、同時攻撃が可能という事だ。
さらにＦ－１５Ｅストライクイーグルの「Ｐ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｆ１００－ＰＷ－２２９」エンジンとＦ－２２Ａラプターの「Ｐ＆ａｍｐ；

Ｗ　Ｆ１１９－ＰＷ－１００」エンジンの推力偏向機構を組み合わせたエンジンを搭載している。
それによって高い機動性とマッハ２．５以上を越える速度を実現し、武装の搭載量も増えた。
Ｆ－２２Ａから最強の戦闘機の座を奪えたかに思えたが、ステルス性能を測る実験機「心神」が間に合わず、ステルス性能は無い。
だが、その性能は十分で第四世代以降の戦闘機を性能で凌駕し、ステルス性能だけを除けばＦ－２２Ａに匹敵かそれ以上とも評され、ドッグファイトなら圧倒的にサベージイーグルが勝っているとも評されているのだ。
無論、Ｆ－２２Ａの技術は極秘だが、その背景にはクトゥルフ事変があった。
クトゥルフ事変を解決したのは日本であり、さらにネイルアンカーという破壊兵器が決め手だった。
アメリカはネイルアンカーの資料を要求し、日本はネイルアンカーの譲渡の条件として難航する次期主力戦闘機（Ｆ－Ｘ）の為にＦ－２２Ａを実験用に数機渡す事で交渉は成立する。
その完成型試作機体が滑走路に着陸した「Ｆ－１５ＪＡ　サベージイーグル」だ。
格納庫に入った戦闘機から出て来たパイロットはヘルメットを取り、空を見上げる。
サベージイーグルのテストパイロットとして選ばれた佐伯玲志（さえきれいじ）は愛機を満足そうに見て笑う。
クトゥルフ事変で使われたＦ－１５ＪＡは、元は誰か見知らぬパイロットが使っていた戦闘機を改造した物だがこれは違う。
入隊当初から使っていた愛機を改修した為、コイツの強みも弱点も癖も全て把握している。
人間以外での相棒はコイツだけだ。
新たに改修されたコイツも最初は嫌がっていたが、今では気に入ってくれた。

佐伯は腕を組むと整った顔立ちに笑みを浮かべる。
その綺麗な黒い瞳が光で一瞬光ると「お疲れ様です」と女性の声が聞こえてきた。
佐伯が声のした方を見るとそこには美しい女性が立っていた。
端麗な顔立ちでモデル体型と、女性なら誰でも羨む外見だ。
ぱっちり二重に目鼻、口のバランスが良く、胸も大きい。
佐伯は瀬上香苗（せがみかなえ）に頬を緩めながら口を開いた。
「お前も大変だったな。やっと今日でエルボーは再編成か」
「隊長の遺志が叶って嬉しいですよ」
瀬上は嬉しそうな声音で言うと手に持っていたボードを佐伯に見せる。
同時に佐伯は目を細めて瀬上に聞き返した。
「新隊長が俺？」
「はい。佐伯一尉なら適任かと思いました」
「そうなったらサベージはどうなる！？」
「その事でしたらご安心下さい」
瀬上は先程渡した書類を差し、雪のように真っ白な指で文をなぞっていく。
眉根を潜めた佐伯がゆっくり読み上げた。
「佐伯玲志一等空尉は本日付けでテストパイロットから第３０５飛行隊への異動を命じる。尚、Ｆ－１５ＪＡ　サベージイーグルを使用し、十分な実地情報を手に入れて欲しい……よっしゃあっ！！」
佐伯はグッとガッツポーズをし、とても嬉しそうに歓喜の声を漏らした。
彼にとっての居場所は空であり、同時に彼が安らげるのは戦闘機の中。
そして彼の唯一無二の親友は愛機だけなのだ。
「よし、今日は俺の奢りで飲みに行くぞ！」
佐伯は香苗の首に腕を回すと嬉しそうに頭を撫でる。
それに瀬上は顔を赤くした。

一気に顔が赤くなりまるで茹蛸のようだ。
「おい、どうした？顔が赤いけど……熱でもあるのか？」
佐伯は手を瀬上に付けようとしたその時、瀬上は慌てて佐伯から離れた。
「だ、大丈夫です！！」
その声に一斉に周りにいた整備士達が笑う。
瀬上は「笑うな！」と怒鳴ると格納庫の入り口に歩いていくが何を間違えたか、扉を開けずに出ようとし、体を扉にぶつけた。
また笑いが出たのは当然で、心配した佐伯が駆け寄るより早く瀬上は扉を開けて閉めたが今度は佐伯が瀬上が閉めた扉の餌食になり、そのコントのような光景に爆笑が出たのは必至。
笑い死にしそうな程笑う整備士達を恨めしそうに一瞥し、急いで瀬上の後ろを追い掛けた。
追い付いた佐伯は顔を真っ赤にして歩く瀬上に口を開く。
「どうしたんだ？」
「何でもありません！」
「何か怒るような事でもしたか？」
瀬上は心の中で佐伯の天然ボケを笑ったが顔には出さなかった。
そもそもこの人は戦闘機の操縦に乗れば格好よいのだが素となると天然ボケが目立つ所が痛い。
瀬上はそんな事を思いつつ聞こえるか聞こえないかの声のボリュームで呟いた。
「……ル……」
「えっ？」
「生ビール飲ませたら許す！」
仮にも上官にタメ口だが、佐伯はそんな事を気にせず、「了解しました、戦乙女（ヴァルキリー）殿」と笑いながら言うと再び瀬上の首に腕を回し歩いて行った。

悪夢

蠕く肉壁。
てらてらと光り輝く粘液が糸を引き不快な匂いを漂わせ、吐き気を催す。
体の四肢が肉壁に取り込まれ、身動きが取れない。
目の前には脈動する肉壁。
そこからゆっくりとした動きで触手が向かってくる。
「いや……いやぁあああっ！！」

「望！しっかりしろ！！望！！」
目を見開き、恐怖に怯えながら絶叫する望の肩を翼が揺さぶると隣に立っていたジェイクが印を結び、望の額に指を当てた。
同時に望はゆっくりと目を閉じて気を失う。
毎夜、クトゥルフの体内に捕らえられたトラウマが夢に出るのだ。
それは恐怖と狂気が混ざった空間であり、夢に出るのは不思議ではない。
そしてその治療の為にジェイクが居候しているという訳だ。
「毎夜、悪いな」
「……気にするな」
ジェイクはそう答えると時計を一瞥した。
時計は２３時を半分程回った頃で寝るには調度いいが先程の事で目が冴えている。
「……一杯やらないか？」
「ああ」

翼は先程とは打って変わって穏やかな望を安心しながら見てから寝室を出て、南京錠が掛かった隣の自室に入り、安いウィスキーと二つのグラスを掴みリビングに下りた。
木のテーブルに向かい合うように座った翼はジェイクにグラスを手渡す。
グラスを受け取ったジェイクは冷蔵庫からミネラルウォーターを掴み、翼に投げて寄越した。
三年間暮らして他人の好みは正確に把握している二人は笑いあう。
「……もう、三年経つのか」
「どうした？歳食ったか？そういうのは老化の兆候だぜ？」
「……黙れよ」
ジェイクはストレートのウィスキーを煽り、続けた。
「……貴様は何も変わってないな」
「そうそう変わらない物だろ？いや、前言撤回だ。お前がいい例だな」
「……確かにそうかもしれないな。俺はＣＡＴＳに入って良かったと思っている」
ジェイクは笑うとウィスキーの中の氷が澄んだ音を鳴らした。
翼も笑い、水で割ったウィスキーを飲む。
それと同時に膝の上に三毛猫の「トロコ」が乗った。
翼は膝のトロコの毛並みを優しく撫でながら「あっ！」と思い出したように口を開く。
「テメェ、子供に余計な事を教えやがったな！？」
「……教育という物だ」
「二歳に何つー言葉を教えてるんだよ。何が教育だよ、テメェ」
「……いずれ知るんだ。遅いか早いかの違いだろう？」
「そういう問題じゃねぇよ」
翼は呆れたように呟くとウィスキーを煽った。
子供に馴れ初めやら武勇伝を教えるか？
「……ところで、貴様は今後、虚数次元（イマジナリー・ディメンジョン）が開くと思うか？」

その単語に翼は顔を下げてウィスキーのグラスを見つめる。
眉を潜めた自分の顔がウィスキーの表面に映り、それを眺めた翼は口を開く。
「どういう事だ？」
「……仮にも虚数次元は自然現象。人為的に開くには魔力を用いるしかない」
「つまり、現段階で開けるのはお前だけか」
「……俺自身、開けるかも分からん。奴らは銀の鍵を用いて開いたのだが、それは実力ではなく物だ。どちらにせよ、開く可能性は限りなく低い」
「じゃあ、何で？」
「……虚数次元はブラックプラズマ。本来は赤い球体の物を確実に別の特異点に、しかも安定させるには奇跡を起こさなくてはならない」
「分からねぇな……つまりどういう事だ？」
「虚数次元は未来の扉。そこから現れたのはアビス。そのアビスが現れた世界はクトゥルフが支配する世界」
「だが、俺達がクトゥルフを葬った。それで未来は変わり今に至っている。虚数次元が開いても問題は無い、違うか？」
翼は顔を上げるとウィスキーを一気に飲み干した。
小さくなった氷も口に含んでアルコールの味がする氷を噛み砕く。
「何を言いたい、ジェイク？」
「……占いだ……」
「占い？」
「ああ……占いで気になる事があった。４月１日に虚数次元が開くらしい」
「４月１日か……だが、何でビビってるんだ？」
「……その日に人類の最終戦争が始まるそうだ」
ジェイクはウィスキーを一気に飲み干すと「らしくない」と呟き、「寝る」と続けた。

一人リビングに残った翼はカレンダーを見る。
４月１日……１０分後か……
何が起きるか、それともジェイクの早い嘘か……
どちらにせよ……
「笑えねぇ……」

4月1日

４月１日
東京都某所
０７：２１

朝の通勤も多少ながら少ない時間帯。
アスファルトで塗り固められた地面を五人の青年達が歩いていく。
補習をやった次の日に学校は冗談抜きで辛い物がある。
裕紀が大きな欠伸を漏らすと晃が後ろ向きで歩きながら裕紀の顔を覗き込んだ。
「なんだよ、だらし無い欠伸しちゃってさ。しゃきっとしようぜ、しゃきっとさ」
晃はハハと笑った。
「お前が元気過ぎるんだよ、馬鹿」
咲也はうんざりしながら呟くと大きな欠伸をした。
「二人揃ってだらし無い！今日はエイプリルフール！一年で一回嘘をついてもいい日だ。壮大な嘘をついてやろう！」
「分かった。じゃあ、お前が言う事は今日は全部嘘だと思うから」
咲也は悪戯な笑みを漏らした。
可愛い顔で笑うと小悪魔のようで、男だと言うことを忘れて見取れてしまう。
「そんなに意地悪しない！」
春香は自分より背の低い咲也の頭をがっちりと掴んだ。
咲也の身長は１６３ｃｍ、春香の身長は１６７ｃｍと頭を掴むのは容易だった。
「僕の頭に触るな！」
咲也がじたばたと暴れ、その横で千尋が笑う。
その日常をほのぼのと見ていた裕紀は何気なく上空を見上げた。

いつもと同じ青空だ。
清々しい青空を眺めていた裕紀は不意に眉を潜めた。
上空に黒い点がある。
その黒い点は動いているようにも見え、裕紀は思わず「ＵＦＯ？」と呟いた。
それに反応したのは晃だ。
「どこ！？」
その声に腹を抱えて笑ったのは咲也だった。
「自分でエイプリルフールがとか言って騙されてるよ」
咲也が笑った瞬間、その黒い点が徐々に大きくなり、電気がショートするような音が響き渡る。
その音に気付いたサラリーマンや学生達も上空を見上げた。
黒い点は大きくなり、黒い稲光を発しながら巨大化していく。
例えるならブラックホール。
その空間に穴が開いたような錯覚に陥る程異様な光景だった。
ブラックホールはゆっくりと、だが確実大きくなり、遂には空を覆い隠す程までに大きくなる。
それは一分だったか、数秒だったか分からない。
ただそれほどに異様な光景だったのだ。
ブラックホールが明滅を始め、その明滅のタイミングが速くなった瞬間、鼓膜が破れるんじゃないかと思う程の轟音が響き、東京中の窓ガラスが一斉に割れる。
同時に一瞬、ジェットコースターが降下する時の浮き上がるような感じがした瞬間、空を覆い隠していた物がブラックホールから巨大な飛行物体が現れた。
ＳＦ映画やゲームで見る侵略者の母船といった印象を裕紀は抱いた。
なにせ、その飛行物体には多数の対空機関砲や飛び出した滑走路らしき物が備えられているからだ。
完全に球体のそれは銀色をしており、メタリックな質感を持っている。

全長は約１０ｋｍはあろうかという、巨大では言い表せない程の大きさだ。
その時、東京のビルに備え付けられていたスクリーンや電気店のテレビが一斉にチャンネルが変わり、三人の男達を映し出した。
中央に座っていた中年で細く鋭い目付きをし、端正な顔立ちの男が口を開く。
『ご機嫌用、原始人諸君。私はウィルコック・ミリタリー・テクノロジー社社長、フィリップ・ウィルコック。我々は未来で世界を支配している者だ』
何事か状況が読めない人々はただスクリーンを注視している。
次に口を開いたのはいかにも頑固そうで物に例えるなら岩という、なんともガタイの良い男だ。
こちらはどうやら日本人らしい。
『不知火重工業社長、不知火裕次郎（しらぬい ゆうじろう）だ。我々はＷｏｒｌｄ Ｃｏｎｇｌｏｍｅｒａｔｅ Ｕｎｉｏｎ、通称Ｗ．Ｃ．Ｕ．と呼ばれている』
次に口を開いたのはこの三人の中で最も若く、金髪のオールバックにサングラスを付けた男だ。
『自分はジークフリーデン社長、アドルフ・ケーニッヒだ。我々の目的は一つ』
その場にいた全員が息を呑むとウィルコックが口を開いた。
『貴様ら原始人を奴隷として未来に連れて行く事だ。未来では人ゲノムが解析され、完璧なクローン等が作られているが、それは模造であってオリジナルではない』
『未来の人口はクローンを除けば１０００人しかいない。その穴埋めに原始人がなってもらおうと考えている』
ケーニッヒが言うと不知火が無表情で言い放った。
『これは貴様らに対する宣戦布告だ。開戦の合図は貴様達が我々の本社艦「アポカリプス」に攻撃してからだ。つまり、我々からは手を出さない。勿論、我々も気は長くないからな……攻撃して来なか

った場合は明後日に攻撃を開始しよう。明確かつ簡略しよう。これは……』

『『第三次世界大戦だ』』

三人が狙い澄ましたかの如く同時に言うとモニターがカラフルな待機画面に変わった。

第三次世界大戦……

あるとしたら核戦争になると軍事専門家が言ってたが外れたようだ。

裕紀は内心呟くと巨大な飛行物体、奴らがアポカリプスと言っていた物を見上げて夢かエイプリルフールの悪い冗談だと言い聞かせた……

水神条約

総理大臣官邸
０９：１１

非常に物々しい雰囲気の中、内閣総理大臣である瀬川靖明（せがわ やすあき）は電話越しに防衛庁に怒鳴っていた。
「国連への水神（みなかみ）条約の提出はまだ！？何をしている！」
（先程の放送により各国首脳陣も混乱していて……）
「有り得ん物が空を飛んでいるのだぞ！！空自は！？」
（現在、最高警戒レベルです。有事関連法が適応されればいつでも出撃出来ます。陸自も短ＳＡＭや近ＳＡＭで周囲を囲んでいます）
「ならいい。水神条約が採択後に各国空軍が合流してから攻撃を開始する。民間人はどうなっている？」
（交通規制を行いましたが、自衛隊車両の通過の為に地下鉄への避難としています）
「やむを得ないか……急ぎ水神条約を提出しろ！！」
瀬川はそう言うと電話を切った。

百里基地
１５：３１

慌ただしく走る整備士達。
怒号と機械の音が響き渡る。
格納庫から離れた控室のソファに座る佐伯は茶色のフィルターの煙

草を口に加えながらモニターを眺めていた。
モニターにはW．C．U．と自称する奴らの乗る巨大な飛行物体「アポカリプス」が映し出されている。
緊迫感を伝えようとするアナウンサーとその後ろの有り得ない飛行物体ではまるで現実味が無く笑いを誘う。
佐伯の頭には一瞬、クトゥルフと交戦したあの光景が蘇った。
また、やり合うのか……
佐伯は煙草を灰皿に押し付けると瀬上が入ってきた。
空自の制服ではなく航空服だ。
「佐伯一尉！」
「瀬上三尉、どうした？」
「先程、当基地に米軍のラプター（Ｆ－２２Ａ）が到着しました」
「水神条約は出さなくても、各国はやる気満々という事か」
佐伯は苦笑すると顔を上げた。
「瀬上、俺はクトゥルフ事変は日本を変えたと思っている」
「どうしたんですか、急に？」
「まぁ、聞け」
佐伯はソファを指差し、瀬上はそのソファに座る。
「クトゥルフ事変が起きる前の日本人は平和ボケしていた。すぐ隣に核を保有している国があって、いつミサイルが飛んで来るかもしれないというのに、平和だと謡ってやがった。結局は実際に起きなければ理解出来なかったんだ。その平和がまるで当たり前のように……だが、そんな物は偽りだ。もし、核を積んだ爆撃機が日本を攻撃しようとしても、先制攻撃が出来ない。空自にスクランブルが掛かって出撃しても先制攻撃出来ない。核を落とされて初めて攻撃出来る、仲間が目の前で撃墜されてから攻撃出来るなんて馬鹿げてる。それを是とする奴らもな……それがクトゥルフ事変で崩れ去った。先制攻撃しなければやられると理解したからな」
そこまで言って佐伯は煙草を掴んだ。
「危険思想だと思っても無理は無い。だが、戦争はやっちゃなんね

ぇものだと思っているのは理解してくれ」
「つまり、守るには戦わなければならないという事ですね？」
「ああ」
佐伯は立ち上がると煙草に火を付けて格納庫に向かって歩いていった。
格納庫にはＦ－２２ＡラプターやＦ／Ａ－１８Ｅスーパーホーネット等のアメリカ軍の機体が駐機している。
それと同時に向こうの滑走路にＳｕ－３３フランカーが入ってきていた。
俺達は負けない、必ず糞野郎を落としてやる。
佐伯は愛機を見つめると拳を握りしめた。

鬼無神社
１８：０１

ニュースでは国連が日本が提出した水神条約を採択した事を語っている。
既に多数の各国空軍戦闘機が日本に駐機したと聞く。
という事は早くとも明日の朝には攻撃が開始されるだろう。
ジェイクの占いが当たったという訳だ。
「笑えねぇ……」
翼は小さく呟くと望がリビングのテーブルにカレーの入った鍋を持って来て、椅子に座った。
「私達が未来を変えたはずなのに……未来が変わってこんな事になるなんて……」
「相手は人間だ。大丈夫だろう」

「やけに楽観的ですね」
「こういう時だからこそ前向きに、だ」
翼が笑ったその時、家の備え付けの電話が鳴り響いた。
普通の家には無い昔ながらの黒電話の受話器を取った耳に、多分一生聞くことは無いと思っていた女性の声が反響する。
（テレビを見ているか、桐生！！）
あまりの怒鳴り声に翼は一度耳から受話器を離し、呆れたように呟いた。
「どうした、霞さん」
霞傍（かすみ はかな）。
かつてはＣＡＴＳの幹部をしており、桐生達のオペレーターをしていた人物だ。
尤も、彼女自身、ＣＡＴＳの前進部隊である未確認生物処理隊に所属し、アビスを狩っていた。
その為、戦闘能力は高くオペレーターの垣根を越えてあらゆるミッションに参加している。
今は特殊科にいると聞いていたが、何故電話を？
（水神条約が採択された事は知っているな？）
「ああ……まさか！？」
（最悪の場合、お前達が召集される可能性がある）
「何だと！？」
（非正規部隊としてのＣＡＴＳだ。当然と言えば当然だろう。未確認生物処理隊や強襲殲滅隊の元隊員達に声が掛かっている。それで……）
「ふざけるなよ！！」
翼の怒鳴り声に望やジェイクが振り返り、叶や翔が怯えたように「お父さん？」と呟き、翼は目を閉じて首を振った。
（お前の気持ちは分かる。だが……）
翼は霞の言葉を遮るように受話器を置いた。
深い嘆息が漏れた後、翼はリビングの椅子に座り、笑顔を振り撒く。

「腹減ったな。ご飯食べよう。な？」
「そ、そうだね」
望が皿に白米を盛るのを見つつ、翼は舌打ちした。
どうして戻らなければならないのかと……

開戦

４月２日
百里基地
ブリーフィングルーム
０６：１５

水神条約で集められた各国空軍のパイロット達。
初めて全世界の国々が一つになった瞬間とも言えるだろう。
そこには民族対立や歴史的対立が無く、目的はただ一つＷ．Ｃ．Ｕ．
本社艦「アポカリプス」の殲滅、それだけだ。
暗い部屋を照らすはスクリーンの光だった。
「作戦開始時刻に敵母艦に一斉攻撃を行い、これを殲滅する。以上
がオペレーション『ホーネットネスト』の概要だ。質問は？」
英語で説明し終えた百里基地の司令官が指示棒を下ろした。
同時にドイツ人女性が口を開く。
キリリとした顔立ちで銀髪のボブカットの女性だ。
「敵飛行物体の武装は？」
「対空機関砲のような物が確認されているが詳細は不明だ」
「了解」
「他には？」
次に手を挙げたのはスキンヘッドに筋骨隆々、腕にはドクロにナイ
フがクロスしている入れ墨があるアメリカ人の男だ。
口元には無精髭が蓄えられている。
「奴らに早く一杯奢ってやりてぇんだが？」
「……やってやれ。これは我々の奢りだとな！」
同時に笑い声が渦巻く。
「以上でブリーフィングルームを終了する。作戦開始時刻〇八〇〇
時、以上！解散！！」

東京都某所
０６：３１

地下の広い空間に押し込められた人々。
一日という長い時間をやることも無く過ごしていた裕紀は溜息を漏らすと携帯のバイブの音が微かに響いた。
裕紀が顔を上げると晃が携帯電話を取り出し、耳に当てている。
「もしもし？」
（お兄ちゃん、大丈夫？）
「千夏か……俺は大丈夫だ」
晃の妹である黒木千夏（くろきちなつ）の心配する声がこちらからも聞こえてきていた。
（何時帰って来れそう？）
「分からない。今は地下鉄に避難しているけど、外に出ちゃいけない事になってるから……大丈夫、すぐに帰るよ」
（分かった。気をつけて）
「ああ、じゃあ」
晃は携帯電話を切ると天井を見上げた。
正直不安なんだろう。
晃が中学生の時に両親を亡くしている。
唯一の肉親の千夏が心配で自分が死んだらという意味でも心配なんだろう。
「大丈夫だよ、晃」
裕紀は晃の肩を叩きながら笑うと、晃は疲れ切った笑いを見せた。
「裕紀の言う通りです。ラジオでは水神条約が発令されて各国の軍

隊が集結しているらしいから」
千尋もそれに続く。
皆不安なんだ。
勝つと信じなければやってられないのだ。
クトゥルフの悪夢を忘れていない人々に取って、今回の事件は悪夢の再来に等しいのだから……

「ホーネットネスト」開始前
百里基地
０７：３０

厳戒態勢の百里基地。
物々しい雰囲気の中、多数のパイロットが愛機の中に乗り込んで行く。
上空で空中給油を受けた後に作戦空域まで向かう。
既にＥ－７６７早期警戒管制機が上空で待機、ＫＣ－７６７空中給油機も既に飛び立っている。
（エルボー隊、滑走路への進入を許可する）
「了解、滑走路に進入する」
佐伯は愛機「Ｆ－１５ＪＡ　サベージイーグル」を滑走路に向かわせ、その後ろを瀬上の乗るＦ－１５Ｊがついて来る。
主翼と尾翼の動きを確認したと同時に無線から管制からの命令が聞こえる。
（エルボー隊、離陸を許可する。幸運を）
「ありがとう。エルボー隊、出撃」
佐伯はサベージイーグルのアフターバーナーを全開にすると大空に

飛び立ち、多数の戦闘機の編隊の中に入る。
歴史で初めての世界規模の連合空軍はＦ－１５系列を始め、アメリカ軍の軽量戦闘機「Ｆ－１６Ｃ　ファイティング・ファルコン」や映画「トップ・ガン」で有名な「Ｆ－１４Ｄ　スーパー・トムキャット」、アメリカ海軍の「Ｆ／Ａ－１８Ｅ　スーパー・ホーネット」、世界最強の戦闘機「Ｆ－２２Ａ　ラプター」、さらにはユーロファイター「トーネード」や「ミラージュ」、「タイフーン」、「ラファール」、ロシア海軍の「Ｓｕ－３３　フランカー」やロシア空軍の「Ｓｕ－３７　ターミネーター」、「ＭｉＧ－３１　フォックスハウンド」、中国の「Ｊ－１０」等の顔触れだ。
ここまで有名な戦闘機が東京に集う事を誰が予想しただろうか？
「壮観だ」
佐伯が小さく呟くと、瀬上が笑い混じりに呟く。
（そうですね、ブリッツ）
「ブリッツ（閃光）」とは佐伯のＴＡＣネームだ。
高い操縦技術を持つ、佐伯はアフターバーナーを蒸し、電光石火で敵を撃墜する様からこのＴＡＣネームが与えられた。
「ヴァルキリー。後ろは頼むぜ」
ＴＡＣネーム「ヴァルキリー（戦乙女）」は瀬上の可憐で勇ましい姿から名付けられている。
（勿論です）
瀬上は笑うと向こうにはっきりと見えるアポカリプスを見据える。
（やりましょう！）
「ああ！」

東京都某所

０７：５５

地下鉄を揺るがす振動。
鼓膜を震わせる凄まじい轟音。
遂に空軍が来た事を知った裕紀達はラジオを駆け寄った。
（今から各国空軍の攻撃が始まります！私達は東京スカイツリーで中継しようと思います）
熱が込められたその口調は興奮なのか恐怖なのかは分からない。
だが、今から戦争が始まる事には変わり無いのだ。

ホーネットネスト

「ホーネットネスト」開始前
東京都某所上空
０７：５９

東京上空の多数の戦闘機がアポカリプスに向かって行く。
Ｗ．Ｃ．Ｕ．の本社艦「アポカリプス」は悠然とし、まるでこちらを気にしていない。
だが、しかし、今から開始される攻撃には気にしない訳にはいかないだろう。
作戦名「ホーネットネスト」はスズメバチの巣の形が円形だという所からきている。
つまり、地球という巣に宣戦布告を行った外敵に対し、我々空軍というスズメバチが外敵を攻撃するという訳だ。
佐伯はヘルメットのＨＵＤに目標を捉えた。
作戦開始時刻まで残り……３……２……１！！
（作戦開始時刻。全部隊、作戦を開始！）
早期警戒管制機「ＡＷＡＣＳ（エイワックス）」からの指示でアポカリプスへの攻撃が下された。
佐伯はサンバイザーを下ろすとＡＡＭ－３対空ミサイルを選択する。
「エルボー１、ＦＯＸ２！！」
（エルボー２、ＦＯＸ２！！）
瀬上の声が無線から聞こえてきた刹那、無線からは赤外線誘導空対空ミサイルの発射を意味する「ＦＯＸ２」の単語が響いてくる。
伸びて行くミサイルの白煙で視界が遮られ、空には無数の線が描き出された。
さらに地上に待機していた陸上自衛隊の「８１式短距離地対空誘導弾（短ＳＡＭ）」と「９３式近距離地対空誘導弾（近ＳＡＭ）」、

さらには「０３式中距離地対空誘導弾（パトリオット）」から放たれたミサイルも伸びて行く。
真っ直ぐと航跡を残す白煙はそのままアポカリプスに作られ、まるで橋のようだ。
ミサイルの数はおよそ２００を越える。
各国空軍の戦力が１００以上でミサイルをそれぞれ2発発射していれば自然にそうなる。
途方も無いミサイルを喰らえば、たとえどんな物でも撃墜か、悪くても致命傷となるはず。
誰もがそう考えていた。
（ミサイル、急激に失速！！）
ＡＷＡＣＳの声にその場にいたパイロット全員の体の血が急速に凍り付いていく。
ミサイルは目標の手前でエンジンを停止、落下していくのだ。
ミサイルは大半が空中で炸裂し、残りは地面に落下してビルを破壊する。
同時に男の声が無線に響き渡った。
（愚かな原始人諸君）
（無線に割り込んで来やがった！？）
ウィルコック・ミリタリー・テクノロジー社の当主ウィルコックの声にＡＷＡＣＳが驚きの声を漏らす。
（驚くのも無理は無いだろうが、我々は進んだ技術を持っているのだ。そのような事、造作もない。君達のミサイルだが、我々の技術には通用しない。電磁絶対装甲とでも言おうか？アポカリプスに近付いた敵性反応の機械の動きを止める物だ）
まるで新しいおもちゃを自慢するようにウィルコックが言うと笑い声が響き渡り、唐突に無線が途切れる。
その時、戦闘機パイロットの声が無線から響き渡った。
（デカイ奴から戦闘機が発進している！）
その声に佐伯は前を凝視する。

アポカリプスの下部に花びらのような配置で多数設置された滑走路から白銀色の塗装が施された戦闘機が発進していた。
キャノピーが見当たらないが、外観は「Ｆ－２２Ａ　ラプター」の試作機体「ＹＦ－２２」とトライアルで敗れた「ＹＦ－２３　ブラック・ウィドウ　？」そのものだ。
敵性戦闘機は三本の滑走路からそれぞれ一機ずつ飛び出し、編隊飛行で向かってくる。
（何が起きている？戦闘機を確認出来ないぞ！？）
ＡＷＡＣＳの声に佐伯は思わずレーダーを見る。
ＡＷＡＣＳの言葉通り、レーダーには何も映っていない。
ステルスにしても何も映っていないのはおかしいはずだ。
しかし、たった三機で何をやろうというのか？
「エルボー隊、編隊を整えろ。攻撃するぞ」
（（了解！））
エルボー隊全員の声が聞こえてきた瞬間、警告音が響き渡った。
佐伯が身構えた瞬間、他の無線からも微かに警告音が聞こえてくる。
だが、距離は約３０ｋｍ、回避するにしても余裕がある。
同時にミサイルアラートが鳴り響き、敵性戦闘機からそれぞれ２発計６発の通常より少し大きめのミサイルが向かってきた。
「エルボー１、ブレ……」
そこまで言ったその時、無線から次々と、編隊から離れる意味の「ブレイク」という声が聞こえてくる。
それはほぼ全ての機体から聞こえてくる。
ミサイルが約８ｋｍまで迫ったその時、ミサイルの外殻が外れ、そこから通常よりも小振りのミサイルが１０発、分離し、向かってきた。
それは言うならクラスター爆弾のミサイル版、「クラスターミサイル」とでも言うべきか？
「全機ブレイク！！」
佐伯は怒鳴り、エルボー隊の編隊が崩れ、他の編隊も散開するよう

な動きを見せた。
しかし、それより早くクラスターミサイルの子ミサイルが他の機体を次々喰らう。
無線から響く断末魔を聞きながら佐伯は舌打ちし自らも回避行動を行った。
横に急旋回し、ミサイルが機体のすぐ後ろを掠めて行き、ビルに直撃したのをキャノピー越しに確認した佐伯はレーダーを見て言葉を失う。
沢山いた仲間が半数以上レーダーから消えている。
「エルボー隊！誰かいるか？いたら返事をしろ！！」
（こちらエルボー2、ヴァルキリー……無事です）
機体を整えたサベージイーグルの脇に瀬上が操るイーグルが並ぶ。
「俺が奴の後ろに取り付く！援護してくれ！！」
（ウィルコ！）
瀬上の了承の言葉を聞いた佐伯はアフターバーナーを蒸し、敵性戦闘機と擦れ違った。
キャノピーが無いからどんな奴が乗っているか分からない。
今頃、どんな面してやがる！
佐伯は凄まじいGに堪えつつ、機体を宙返りさせて敵性戦闘機を見た。
これで確実に後ろを取れたはずだ。
佐伯が確信し、HUDに敵性戦闘機を捉えた瞬間、信じられない光景が映った。
三機の機首が全てこちらを向き、まるでVTOL（垂直離着陸）戦闘機の如く滞空している。
有り得ない！
佐伯が息を飲んだ瞬間、ロシア海軍所属のSu－33　フランカーからミサイルが放たれた。
敵性戦闘機は三機が散開するようにミサイルを逃れた。
FOX3というアクティブレーダー誘導空対空ミサイル発射という

意味を口にしたフランカーパイロットは佐伯の後ろに取り付いた。
（こちらグラーチュ隊二番機、ヴォーラン）
ロシア語訛りの英語から察するにこのフランカーのパイロットのようだ。
穏やかな口調だがグラーチュ（ミヤマガラス）とヴォーラン（鴉）のダブルネーミングとは……
（僕の隊は全滅した。今から君達の三番機につくよ）
「こちらエルボー1、ブリッツ。ありがとう」
（どうやら、僕達がスズメバチの巣を突いたようだな）
ヴォーランと名乗るパイロットが自嘲気味に呟くと、佐伯は上手いなと球体のアポカリプスを一瞥する。
佐伯は正面を向くと、思考を働かせた。
問題は敵がどうやってこちらを向いていたかだ。
「こちらエルボー1。エルボー2、後ろに着いて援護。グラーチュ2は自分と敵の攻撃をお願いしたい」
（（ウィルコ））
Ｗｉｌｌ　Ｃｏｐｒｅｈｅｎｄ、つまり命令を実行するという意味だ。
（僕が先行する。君の実力を見せてくれ）
「ああ！」
アフターバーナーを蒸したフランカーが先行していくのを確認した佐伯はサベージイーグルのアフターバーナーを蒸し、フランカーの後ろに続いた。
目標は散開した三機のうちの一機。
ユーロファイターを喰らっている奴に狙いを定めたフランカーは機首を上げて上昇する。
サベージイーグルは敢えて追い掛けずに真っ直ぐ向かって行く。
敵性戦闘機はクラスターミサイルで次々とユーロファイターを喰らっていくがその暴挙もここまでだ。
「連続殺人犯（シリアルキラー）が……」

佐伯は小さく口にしたその時、上空から機関砲による銃撃が敵性戦闘機に行われた。
同時にフランカーが下に一気に下降していき、敵性戦闘機と擦れ違う。
敵性戦闘機は空中で制止したかと思うと、機関砲があるだろう位置から銃身が飛び出す。
そして銃身が光ったかと思うとフランカーとの斜線上の地面が陥没した。
フランカーがアフターバーナーを蒸して、高層ビル群の中に飛び込むと続けてその中に向けて敵性戦闘機が撃ち込んだ。
その威力と光で佐伯はそれが何か理解した。
レールガン。
電磁誘導で弾丸を射出する兵器だ。
その速度、威力は従来の火薬で発射される物の比にならない。
フランカーへの撃ち損じはある意味ヴォーランの運が良かったのだ。
あんな物を喰らったら戦闘機所か戦車ですら一撃だ。
しかし、敵性戦闘機はフランカーに気が向いている。
やるなら今だ。
サベージイーグルから放たれたＡＡＭ－４対空ミサイル二発は敵性戦闘機に向かって行く。
敵性戦闘機はフランカーを狙って後ろを向いていた為、一発はエンジンに、もう一発は右尾翼に直撃した。
そして瀬上の駄目出しの一発を喰らい、敵性戦闘機の機体はバラバラに四散する。
（日本人だと思って嘗めていたよ）
聞き覚えのある女性の声に佐伯が眉を潜めるとコックピットが影で暗くなった。
佐伯が上空を見上げるとユーロファイター「トーネード　ＩＤＳ」が横に一回転しながら降下し、サベージイーグルの後ろにつく。
（アタシはリヒト隊、ヒルベルト）

「ヒルベルト……傭兵？」
この声はブリーフィングで質問していた女性の声だ。
ヒルベルトと名乗るトーネードパイロットはハスキーボイスで、男勝りな口調で言い放つ。
（あんたらの三番機につくよ）
（おっと、三番機の先約は僕だから）
先程のフランカーパイロットがサベージイーグルの後ろに付きながら微かに笑っている。
「とにかく、残りは二機か」
正面にはドッグファイトを行っている敵性戦闘機とラプター、右には他の米軍機を襲っている敵性戦闘機。
どちらにせよ、戦わなければ全滅だ。
その時、ＡＷＡＣＳの声が響き渡った。
（皆、聞け。本部から撤退命令が下った）
「撤退！？」
（嘘……）
（全機、進路を西に取り空域から離脱せよ）
「その命令は了承しかねる！」
（聞け！こちらは投入戦力の８０％を失った。敵はこちらで確認出来ない為サポートが出来ず、敵母艦に残り何機いるかも分からん。戦力的不利は明らかだ。当空域から撤退せよ！！）
首都を見捨てろと言うのか？
（どうするんだい？）
ヒルベルトの声が聞こえると同時に佐伯はゆっくり頷いた。
「我が隊はこれより米軍機の救助を行う。右は三機で頼む」
（あんたはどうするんだい？）
ヒルベルトの声と同時に、正面のラプターが撃墜される。
「正面をやる！全機ブレイク！！」
佐伯の声と同時に、全機が散開する。
他の三機が右に向かったのを確認し、サベージイーグルはアフター

バーナーを蒸した。
同時に正面の敵性戦闘機がサベージに向かってくる。
レールガンユニットを突き出したのが見えた佐伯はサベージの機首を敵性戦闘機から逸らすと体を突き抜ける衝撃波が通過した。
レールガンから放たれた弾丸が横を通過したのだ。
「嘗めやがって！」
サベージと敵性戦闘機が擦れ違う。
その後、有り得ない機動で反転攻撃するだろうと予想した佐伯は宙返りせずに機首を上げたが、その予想は外れ、サベージの後ろに取り付く。
サベージは素早く左右に動いて避けようとするが敵性戦闘機はしつこく追い縋ってくる。
（こちらヴァルキリー！隊長、今から援護に向かいます！）
「いや、いい」
佐伯は短く答えるとアフターバーナーを蒸しながら垂直に上っていく。
それに合わせて敵性戦闘機も上昇する。
数秒間追い掛けられたその時、サベージイーグルがエアブレーキをかけて、敵性戦闘機がサベージの前に飛び出す。
このタイミングでのエアブレーキは空中で停止したように見え、敵性戦闘機は必然的に前に出てしまう。
チャンスは一瞬。
佐伯はサベージの２０ｍｍバルカン砲を発射した。
次々に放たれる２０ｍｍ弾が敵性戦闘機を貫き、止めにミサイルが撃ち込まれる。
敵性戦闘機はエンジンから火を噴きながら回転し、数秒後に爆発した。
同時に先程の三機ともう一機、アメリカ海軍の戦闘機「Ｆ／Ａ－１８Ｅ　スーパーホーネット」が編隊に加える。
（助かった。こちらスカーレット隊、ガルム）

「これより我々は撤退します」
（分かった、同行する）
彼も声音からブリーフィングで口を開いた男性のようだ。
「エルボー隊、撤退する」
佐伯の言葉に追従するように四機がついて来る。
奴らに煮え湯を飲まされた形の撤退。
屈辱の撤退に佐伯は舌打ちし、アポカリプスを一瞥した。
いつか落としてやる……この機体で！！

陸戦兵器

アポカリプス内部
０８：３１

暗い室内を唯一照らすスクリーンを眺めた三社の当主達はまるでスポーツ観戦をしているかのようだ。
「圧倒的だ！たった３機で１００機以上を撃破した」
ウィルコックは興奮した声音で叫ぶとアドルフも笑いを堪えながら口を開く。
「こちらの消耗は０．１％以下だ。これは一方的だな」
「しかし、敵にも腕利きのパイロットがいるみたいだな。油断はできん」
不知火が静かに言うとウィルコックは鼻で笑い、立ち上がった。
「これより地上部隊を投入する！！」

元ＣＡＴＳ本部現Ｗ．Ｃ．Ｕ．対策室「老神島」
０８：３９

円形の机とその椅子に座る各国の首脳陣が撤退する空軍をレーダーで見つつ、意気消沈となっていた。
多数の戦闘機が数十分でやられるとは……
しかもアポカリプスにダメージすら与えられていない。
これでは攻撃に参加し、殉職した隊員は犬死にだ。
瀬川が深い溜息を漏らしたその時、官僚が走り、瀬川に耳打ちをす

る。
それに瀬川は小さく「分かった」と呟き、前を真っ直ぐ見据えながら口を開いた。
「先程、アポカリプスから多数の二足歩行兵器や飛行兵器が発進したそうだ。我々は今から陸上自衛隊を向かわせ、取り残された市民の救助を行う。アメリカ軍には協力をお願いしたいのだが、よろしいですかな？」
「人類の危機だ。今から部隊を編成しよう」
「協力に感謝します」

東京都某所
０８：５０

空軍が壊滅した事で混乱し、パニックとなった。
その中で警察の怒鳴り声よりも群集の悲鳴の方が大きい。
裕紀達もその波に揉まれていたが、外に向かう群集とは別に中に向かっていた。
地下鉄は最悪生き埋めになっても、線路が続いている限りは何処からでも脱出出来るからだ。
裕紀達は離れないように手を繋ぎ奥に向かい、売店を通り過ぎた辺りで右手に握っていた千尋の手が離れた。
「裕紀！」
千尋は後ろを向き、波に逆らおうとするが、その波の力は凄まじく、入口に千尋を引っ張っていく。
裕紀は握っていた晃の手を離して追い掛けた。
人の波を掻き分けるのは用意で、引き波に向かって泳ぐのと同じ程

容易だ。
裕紀は千尋の手を握り、再び戻ろうとするがどう頑張っても戻れず、とうとう入口まで流された。
入口から吐き出された人々は蜘蛛の子を散らすように外に飛び出して行く。
二人は勢いに負けて地面に倒れるが、裕紀は千尋に覆いかぶさり、千尋を庇う。
しかし、追い討ちをかけるように裕紀の体を蹴り飛ばし、駆けて行く群集。
どうして人はこのような非常時に他人を助けるような事はしないのだろうと苦痛で顔を歪める裕紀を見ながら千尋は思う。
裕紀は身を犠牲にして私を守ってくれているのに……
群集が消えたのを確認した裕紀はボロボロの制服姿のまま立ち上がった。
「大丈夫？」
「ああ」
「君！大丈夫か！？」
誘導を行っていた警官が傷付いた裕紀を見付けて駆け寄ってきた。
「大丈夫です……っつ！！」
裕紀が崩れた瞬間、千尋と警官が駆け寄る。
「中で手当を受けないと……」
警官が心配そうに顔を覗き込んだその時、地面が揺れた。
怪獣映画等でよく見る、足跡がクローズアップされてそこに溜まった水が揺れる演出に似ている。
三人が顔を上げると５０メートル先に銀色の巨大なロボットとでも言うべき兵器が立っていた。
構成は基本的な人間型で全体的に角張り、重厚な印象を与える。
高さは約１０メートル強、頭部はカメラアイと思われる単眼が赤く光り、右手はガトリング、左手は巨大な滑空砲にも似たランチャーが取り付けられ、銀色の塗装が太陽に照らし付けられ、目立ってい

た。
「何だ、ありゃ！？」
警官が小さく呟くと、ロボットは左手のランチャーをこちらに向けた。
戦場で敵に向けた銃口が成すことはただ一つ。
裕紀は慌てて千尋の手を引っ張り、地下鉄の中に飛び込んだ。
遅いか早いかだった。
何があったかは分からない。
土煙が舞い上がり、地下鉄の構内が瓦礫で塞がっていた。
警官の使っていたリボルバー「Ｍ３８　エアーウェイト」が床に転がっている。
裕紀は疼く体に鞭打ち、エアーウェイトを掴みながら立ち上がった。
完全に閉じ込められたらしい……
「裕紀！千尋！大丈夫？」
様子を見に来た咲也が大声で問い掛けながら走ってきた。
「凄い爆発音が聞こえたけど……」
「例の敵だよ。ここも危険だ。先を急ごう」
裕紀はそう言うと学生服のズボンに拳銃を押し込み、三人を伴って奥に向かった。

戦争

東京都上空
０９：４６

東京に向かう多数の大型輸送ヘリコプター「ＣＨ－４７　チヌーク」のローター音が響き渡る。
東京に一直線に向かうその機体の一機の中に浅香がいた。
何処か不満げな様子の浅香の所属は今は普通科だ。
特殊科から外され、結局戻され、揚げ句有事とは……
だが、ここで挽回して手柄を立てれば自分もあの人に、クトゥルフを倒した人に近付ける。
普通科でも個人のスキルがあればどんな敵でも倒せるはずだ。
浅香が陸上自衛隊正式採用突撃銃「８９式小銃」を脇に抱えると決意を固めた。
その時、３０歳半ばの男性が椅子に腰掛けながら浅香を見て口を開いた。
「特殊科から来たそうだな……確か浅香陸士長と言ったか？」
「は！」
浅香が反射的に口を開くと男性は鼻で笑った。
キツイ目付きに黒いショートヘア、顎を覆う短い無精髭が印象的だ。
「俺の隊はチームワークを主とする。間違ってもスタンドプレーには走るなよ？」
島義明（しまよしあき）は分隊支援火器で有名なＦＮ社の「ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃」に初弾を装填しながら言うと煙草を取り出し、口に挟んだ。
島が懐からライターを取り出したその時、隣を飛んでいたチヌークが爆発四散する。
その衝撃と轟音がチヌークを突き抜け、ヘリがバランスを崩す。
「掴まれ！」

島が怒鳴ると同時にコックピットに弾丸が撃ち込まれ、異質な空間に変わっていく。
まるで薄い紙に電動ガンによるＢＢ弾の射撃を浴びせ掛けているかのようだ。
それ程までに簡単に弾丸が貫通し、ヘリは舞い散る木葉のようにクルクルと舞い、地面に向かっていく。
何が何だか分からない浅香はフリーフォールをしているかの如く浮き上がり、耐え切れず手摺りを離してしまった。
浅香の体は宙を舞い、窓を突き破って外に投げ出される。
何が起きているか分からない浅香の体に貫くような衝撃と背中に鈍痛が走った。
微かに呻いたその時、１０メートル先にヘリが落下し、爆発する。
凄まじい火柱と黒煙を立ち上らせるチヌークは破片を撒き散らす。
浅香は軽く咳込み、立ち上がると墜落したチヌークに向かって歩いた。
周りにはバラバラになった自衛官達の死体が散乱し、ちぎれた腕等が痙攣している。
その生々しく、グロテスクな光景は浅香の胃から物を逆流させるには十分だった。
酸っぱい液体が不快な匂いとともに逆流し、浅香は地面に突っ伏し、その液体を吐き出した。
「浅香士長、大丈夫か？」
その声に浅香は涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を上げた。
燃え盛るチヌークのすぐ脇にいた人影は島だ。
島は脇腹を押さえながら、深く息を吸い込み苦笑を浮かべる。
「酷い目にあったな……」
「痛っ……島さん、無事ですか？」
不意にチヌークの後ろから声が聞こえたかと思うと、覚束ない足取りで柊涉陸曹長（ひいらぎわたる）が歩いてくる。
柔らかい笑みを浮かべた顔の柊は近くに落ちていた８９式小銃を掴

むと後ろに倒れた。
「大丈夫か？」
「足が馬鹿になってるだけです」
柊はゆっくり立ち上がると８９式小銃のグリップを握った。
他に生存者は見当たらない。
遠くから爆発音が聞こえてくる事から考えるに向こうは激戦だ。
島は無造作に落ちていた無線機を掴み、チューニングを行うと声を吹き込んだ。
「本部、こちら島義明二等陸尉送れ」
（こちら本部。どうした島二尉？）
「我々のヘリが敵対空機関砲の攻撃により墜落！他の部隊と合流したい」
（了解。近くを通過する特殊作戦群に拾わせる）
「了解！ここで迎えを待つ。終わり」
島は無線を切るとＭＩＮＩＭＩ軽機関銃を拾い上げた。
その横で柊は短く切ったスポーツカットに鉄帽を被り、８９式を背負いながらボルトアクションとして有名なレミントン社の狙撃銃「Ｍ７００」の陸軍モデル「Ｍ２４」を掴む。
「本部はなんて言ってました？」
「ここに特殊作戦群を向かわせるそうだ」
「特殊作戦群！？」
浅香の素っ頓狂な声に二人が同時に浅香を見た。
浅香にしてみれば特殊作戦群とは関わりたくなかったのだろう。
しかし、そんな甘ったれた事を言っている暇も余裕も無いのが現状だ。
島が浅香を諌めようとしたその時、二人の間を赤い閃光が横切った。
三人が条件反射で体をチヌークの影に隠すと、柊がＭ２４のスコープを覗き込んだ。
「敵襲！！目標、七！！距離、三百！」
「畜生！狩りに来やがった！応戦するぞ！」

島は近くに落ちていた８９式小銃から弾倉を抜き取ると脇に置き、ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃を構えた。
距離的には十分だが、必中させるには遠すぎる。
「引き付けろ！」
浅香は８９式小銃をセミオートに変え、物陰から様子を見る。
ＳＦ映画から出て来たような全身を覆う白い装甲服から察するに敵は人間。
人間を撃つなんて俺には出来ない！
さっきまで平静だった手がやたらに震え、動悸が激しくなる。
それは尋常ではなく、銃が揺れる音が聞こえる程だ。
「島二尉！！敵は人間です！！話し合いで解決出来るかも……」
「甘ったれた事言ってんじゃねぇぞ！！これは戦争だ。やらなきゃやられんだよ！柊、やれ！！」
「了解」
柊はスコープを覗き込むと慎重に引き金を絞った。
耳をつんざく銃声に浅香は思わず体をビクリと動かす。
「標的ダウン！！」
柊の声に合わせ、浅香は恐る恐る顔を覗かせた。
装甲服を着た戦闘員の顔の見えないヘルメットに一つの穴が開いている。
確実に死んだ。
死んだんだ。
その事実だけを物語る敵の、Ｗ．Ｃ．Ｕ．の戦闘員は動かない。
思わず絶叫しそうになった浅香だったが、別の六人の戦闘員の持つ２００３年に計画が凍結されたＨ＆ａｍｐ；Ｋ社の個人主体戦闘火器「ＸＭ２９」に酷似した銃から赤い閃光が放たれ、体を物影に隠した。
赤い閃光はレーザーのようだ。
「射撃開始！！」
島は怒鳴り、ＭＩＮＩＭＩの引き金を引いた。

入り乱れる５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾とレーザー。
ここは戦場なんだという実感が今になってまざまざと見せ付けられた。
自分はアビスを倒す為に自衛隊に入った。
だが、現実はどうだ？
今目の前にいるのはアビスではなく人間だ。
こんな、こんな事って……
「クソッタレ！」
浅香は怒鳴ると半身を乗り出し、８９式小銃の引き金を引いた。
肩付けで撃った弾丸は衝撃を上手く逃がすまでは訓練だが、動く人間を「実弾で殺す」訓練は行っていない。
手が激しく震えて狙えないのと、生きた人間を殺すという事実によって浅香の放った弾丸は明後日の方向に飛んで行く。
「くそ！くそぉ！」
浅香は一度チヌークの影に隠れるとセミオートからフルオートに変えて、再び乱射した。
重い振動と震える手で上手く狙いが定められない。
「浅香、落ち着け！」
島はＭＩＮＩＭＩの弾倉を取り替えながら叫ぶと銃声に混じって、轟音が響いた。
三人が上空を見上げると、米軍最強の攻撃ヘリコプター「ＡＨ－６４Ｄ　アパッチ・ロングボウ」と自衛隊でも使われている「ＵＨ－６０　ブラックホーク」が合わさった、プロペラの無いヘリコプターが浮いていた。
アパッチのコックピットとラックがブラックホークの機体に置き換えられた外観のヘリコプターはＶＴＯＬの性質も兼ねているらしく、言うならロシアの攻撃と輸送を兼ねた「Ｍｉ－２４　ハインド」と垂直離着陸戦闘機「ＡＶ－８Ｂ　ハリアー？」を足したと言った所だ。
六人の上を滞空しながら機首をこちらに向けるヘリはチェインガン

の銃口を向けた。
同時にとんでもない衝撃とともに、チヌークの腹を弾丸が貫通する。
恐らく、チヌークをやったのと同じ兵器だ。
一瞬、青く光っているのは電気？
「レールガン！？」
柊の声に島は「ＳＤＩ構想のおもちゃを引っ張り出しやがって！」
と怒鳴り、ＭＩＮＩＭＩを敵のヘリに向けて撃ち込むが、通用して
いる気配が無い。
９１式携帯地対空誘導弾（携ＳＡＭ）があれば何とかなるのだが……
その時、凄まじい速度で撃ち込まれた弾丸が敵のヘリの横に直撃し、
爆発した。
ヘリは黒煙を発し、戦闘員の上に落下して大爆発を引き起こす。
三人がゆっくりとチヌークの影から顔を出すと、向かってくる９６
式装輪装甲車とハッチから身を乗り出し、８４ｍｍ無反動砲「カー
ル・グスタフ」を構えた吉良沢が見えた。
吉良沢は中にカール・グスタフを入れると「乗れ」とだけ言って中
に引っ込んだ。
これが戦争……
一瞬気を抜いた方が死ぬ。
浅香は自分の甘い考えを恨み、同時に助かったという安堵を、燃え
盛る敵のヘリを見ながら感じたのだった……

シエラ

０９：５１

９６式装輪装甲車の中に入った島達三人はそれぞれ椅子に座った。特殊作戦群の面子は無言で三人を見ると、吉良沢が中に飛び込み、運転手に「行け」と言う。

吉良沢は装甲車の壁に立て掛けていた米軍のアサルトライフル「Ｍ４Ａ１」にＡＣＯＧスコープが付いた物を掴みながら口を開く。

「作戦を確認する。この作戦は都民の避難の時間稼ぎと作戦名『ホーネットネスト』失敗によって取り残された高射隊の救助だ。高射隊救助後は最も近い部隊と合流、敵の各個撃破を行う。なお、我々の無線呼称はＳ（シエラ）だ。それと島二尉だったか？」

「は！」

「よく生き残ってくれた」

吉良沢は目を細め、嬉しそうに呟くと傍らに置いていた２０ｍｍグレネードランチャー「Ｍ２０３」をＭ４Ａ１に取り付けた。

「大野、目的地までの距離は？」

「およそ１ｋｍ！」

「よし、そのまま……」

吉良沢がそこまで言ったその時、胃まで届く振動とともに運転席が潰れた。

吉良沢が潰れ、血に塗れた運転席のフロントガラスから外を伺う。ビルの一部が倒壊し、土煙が周囲を覆っているのみでよく確認出来ない。

吉良沢は急いで顔をハッチから覗かせると土煙と埃の匂いに顔をしかめる。

周囲を見渡すとビルの一部が破壊された物が確認出来た。

何か戦車砲のような物で撃ったかのようだ。

「何が起きたんだ？」
その時、土煙の向こう側約１０メートルの高さに赤く光る点が一つ、動いているのが確認出来た。
それは重い足音を響かせ、ゆっくりとだが確実に向かって来ている。
「総員降車！！対戦車武器を持て！！」
吉良沢が叫ぶよりも遅いか早いか、煙りが晴れてその兵器が確認出来た。
ロボットというに相応しいその兵器は明らかにこちらを標的としている。
吉良沢はハッチからはい出るように抜け出すと装甲車から飛び降りた。
同時に後部のハッチからも隊員達が飛び出す。
同時にロボットは左手のランチャーを装甲車に向けた。
一瞬、ランチャーが青く光ったかと思うと装甲車が吹き飛んだ。
吉良沢は爆風で吹き飛ばされ、足から地面に落ちたが大事には至らなかった。
吉良沢は慌てて物影に隠れると舌打ちをする。
これも電磁誘導で弾丸を射出するタイプのランチャーらしい。
戦力の差は圧倒的か……
絶望的な状況を理解していたが降るつもりは無い。
吉良沢がＭ２０３をロボットに撃ち込むと同時に自衛官達の一斉攻撃が開始された。
飛び交う５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾にはロボットの装甲を傷付けるがダメージを与える程の威力は無い。
このカメラアイの向こう側でパイロットが笑っているだろう……
「軽ＭＡＴはまだか！？」
吉良沢は０１式対戦車誘導弾（軽ＭＡＴ）を構えた隊員を見ながら怒鳴ると、隊員は軽ＭＡＴを発射した。
コブラが鎌首を擡るように飛び上がったミサイルはそのままロボットの頭上を襲う。

凄まじい爆発と同時に周囲に土煙が舞い上がった。
「やったか？」
浅香が小さく呟いたその時、機械が激しく動く音が響き渡った。
この音は……
「伏せろ！！」
吉良沢の怒鳴り声より少し遅くロボットの右手のガトリングから弾丸が射出される。
音速を超える凄まじい速度の弾丸が吉良沢達の頭上を通過していき、隠れられなかった隊員達の体に風穴を開けていく。
圧倒的という言葉では片付けられない程の威力に吉良沢が舌打ちをする。
射撃が止んだその時、ケーブルが伸びたＴＯＷ対戦車ミサイルがロボットに直撃した。
上空からの凄まじい風に生き残った吉良沢、浅香、島、柊、大野が上空を見上げると、そこには対戦車ヘリコプター「ＡＨ－１Ｓ　コブラ」がホバリングしていた。
この絶好のタイミングで来たヘリは、五人には救世主にさえも見える。
（こちらチャーリー０２。シエラ、聞こえるか？）
「こちらシエラリーダー、チャーリー０２、聞こえている」
（我々はこれより君達の援護を行う）
「了解！！」
吉良沢が言い終わった瞬間、コブラの７０ｍｍハイドラロケット弾がロボットに叩き込まれる。
凄まじい攻撃に未来の兵器と言えども黒煙を噴き出す。
ロボットも標的を特殊作戦群からコブラに切り替え、アイカメラをコブラに向けた。
吉良沢はその隙を狙って、息絶えた隊員に駆け寄り、軽ＭＡＴとそのミサイルを掴み、急いで装填する。
約１１ｋｇの軽ＭＡＴを持ち上げた吉良沢はロボットをコンピュー

ターで捉え、ミサイルを発射した。
再び放たれたミサイルはアイカメラの真上に急降下し、それを粉砕する。
同時にコブラから放たれたＴＯＷがロボットの胴体を破壊し、ロボットは破片をばらまきながら爆発した。
「よっしゃあ！！」
ガッツポーズをする浅香を横目に吉良沢は携帯無線に吹き込んだ。
「こちらシエラリーダー。チャーリー０２の支援に感謝する」
（こちらチャーリー０２。目的地はすぐそこだ。一度我々は補給に戻る。部隊の幸運を祈る）
「ありがとう。シエラリーダー、終わり」
吉良沢は無線を仕舞うとＭ４Ａ１を掴んだ。
「この先だ。急ぐぞ」
「了解っス」
大野はクトゥルフ事変からの愛銃である狙撃銃「ＳＲ－２５」を掴むと吉良沢の後ろを駆けて行った。
「俺達も行くぞ」
「「了解」」
島の声に柊と浅香は応え、目的地へと向かって行く。
もはや進む事しか出来なくなった五人は銃声の轟く方に走って行った……

地下鉄構内

東京都地下鉄内部
１０：１９

売店から取ってきた懐中電灯を片手に歩く裕紀達五人は地下鉄を歩いて行く。
湿気と息苦しさは不快で真夏のようだ。
上では時折悲鳴や銃声が聞こえ、衝撃が地下を揺さ振り、いつ崩れるか分からない恐怖に精神を擦り減らす。
「裕紀、ここから何処に行くんだよ」
懐中電灯を持った晃の声が地下鉄内に響き渡った。
「取り敢えず、ここから出る。助けて貰わなきゃ逃げ出せないから……」
裕紀は警官の形見とも言えるエアーウェイトのグリップを握った。
Ｍ３８　エアーウェイトの装弾数は５発と心許ない。
金属質の銃身が懐中電灯の光で照らされ、人を殺せる武器だと語る。
自分は敵と対峙したらこの銃の引き金を引けるのだろうか？
裕紀が内心呟いたその時、先程の傷が疼き、裕紀は顔を歪めた。
「裕紀、大丈夫？」
「ああ」
「あまり無理はしないでよ？足手まといだからさ」
咲也は心配している事を伺わせたが、皮肉が篭った口調は変わらない。
咲也らしいと裕紀は苦笑いを浮かべ、美少女のような可愛い顔を一瞥する。
「でもさ、ここから逃げ出すにしてもどうやって、自衛隊と合流するの？」
春香の一言に四人は足を止めた。

確かにその通りだ。
地上は戦場で何処で戦闘が行われているかも分からない。
つまり、声が聞こえて駆け寄ってみれば敵で射殺なんて事も十分有り得る訳だ。
「どうする？」
「でも、結局はここから出なければ意味がありませんよ？」
晃の声に千尋は嘆息を漏らす。
誰もがこの空間から抜け出したいのは分かる。
精神が擦り減り、命の危険に晒されていれば誰だってそうなる。
「落ち着けよ。ここで言い争っても仕方な……」
咲也が諌めるように言った瞬間、暗闇を切り裂く青い閃光が咲也に直撃し、糸の切れた人形のように崩れ落ちる。
「咲也ぁあ！！」
裕紀が叫んだ瞬間、次は春香が床に崩れ落ちた。
三人は壁に設けられた隙間に身を隠し、晃が様子を伺う。
懐中電灯に照らされた地下鉄構内の中を人影が二人、ＳＦに登場するような装甲服を着た戦闘員が向かってくる。
奴らが持っている銃は一般的な自動拳銃と同じ外観だが、銃身の長さが通常の１．５倍はある。
信じたくはないが恐らくレーザー銃の類だろう。
咲也や春香も身動き一つしていない。
親友の死を目の当たりにした三人は何も考えられず、ただ倒れる二人を見つめるしかなかった。
「目標沈黙」
「対象の捕獲を開始」
「残りの目標の捕獲も遂行する」
無感情なその声は戦闘員のものだろう。
「ふざけるな！！」
人間という認識よりも敵という認識が勝った。
裕紀はエアーウェイトのグリップを強く握ると壁越しから引き金を

引く。
銃声とともに吐き出された弾丸は当たるはずもなく、戦闘員の足元に着弾する。
「目標の反撃を確認。捕獲中止、排除する」
戦闘員の声と同時に赤い閃光が地下鉄の中を照らす。
まるで敵意を色で表すかの如く、その赤で地下鉄を照らしていく。
「くそ！！くそぉ！！」
裕紀は敵に二発放ったが、結果は同じだった。
刹那、その閃光が眼前を掠め、裕紀は壁に隠れる。
「貸してくれ」
晃はいつもの様子ではなく、言葉を押し殺したように呟いた。
その声に裕紀は息を切らし、壁に背を向けながら晃にエアーウェイトを手渡す。
壁に背を向けた裕紀は防火用の斧を掴んだ。
「俺が武器を無力化する……頼んだ」
「……分かった」
裕紀の呟きを聞いた晃はエアーウェイトの撃鉄を下げた。
カチリという金属音と同時に引き金が軽くなる。
初心者が銃を撃つ為に必要な行為だ。
この行為によって引き金は軽くなるのだ。
銃身の先端に付けられたフロントサイトで狙いを定める。
元より銃身長を切り詰めたその銃は威嚇の意味合いが強い。
しかし、晃の正確な射撃は戦闘員の武器を撃ち抜き、二射目でもう一人の戦闘員の武器を撃ち抜いた。
飛び散る部品、轟く銃声、それと同時に裕紀の雄叫びが響き渡る。
脇構えのまま駆け寄る裕紀は一気に戦闘員まで迫り、斧を横に一閃した。
鈍い金属音が響き渡る。
２メートル程吹き飛ばされた戦闘員はピクリとも動かない。
それに反応した戦闘員は腰に差していた棒を握る。

同時にその棒から短いレーザーが現れ、斧の柄を斜めに切り落とすが、それが運の尽きだった。
先が尖り、オレンジ色に熱せられた柄で裕紀は戦闘員の装甲服に突き立てる。
短い呻き声が漏れ、戦闘員は力無く倒れた。
腹に突き刺さった柄からは血が滴り、床を赤く染める。
裕紀には人を殺したという事を確かめるよりも、二人の安否を確かめる方が先だった。
急いで二人に駆け寄った三人はそれぞれ脈を確認する。
微かにだが脈は有るし、息もしている。
捕獲と言っていたが、だとすればあの青い閃光は神経を麻痺させる物という訳か？
裕紀が安堵したその時、晃が大声で叫んだ。
「おい、見ろよ！コイツらの顔……」
戦闘員のヘルメットを取った晃の声に二人が駆け寄ると二人は息を呑んだ。
戦闘員の顔は……

決断

東京都
１０：２０

東京で飛び交う銃弾と轟く銃声を誰が予想していただろうか？
浅香は８９式小銃を握り、歯をギリと鳴らす。
死の淵にいて、気が付いたら人を撃つ事を躊躇わなくなってしまった浅香は何処かで自分に酔いながら、恐怖すら感じていた。
そんな自分が許せなかったが、飛び交う閃光の前ではそれを考えている暇など無い。
浅香は自衛隊が使う８９式小銃の銃口に装着するライフルグレネード「０６式小銃擲弾」を戦闘員の中に撃ち込んだ。
着弾したグレネードは凄まじい爆発により戦闘員を吹き飛ばす。
「火力を集中だ！！押し切れ！」
島は怒鳴りＭＩＮＩＭＩで弾丸をばらまく。
広い路地を走る五人に容赦無く浴びせ掛ける弾丸も、上空のコブラによる機関砲でそれも止む。
（こちらチャーリー０２、敵の反応は無い。シエラ、進め！）
「こちらシエラリーダー、了解した」
（一旦補給に戻る。目的地は目前だ。補給が終了次第、援護に戻る。幸運を！）
「ありがとう。シエラリーダー、終わり」
吉良沢が無線を切ると同時にそれぞれが訓練通りにカバーポジションに入る。
無駄の無い動きは自衛隊の本気だ。
目標まで駆けて行く五人は上空のアポカリプスを見上げる。
どこまで作戦が進行しているかは分からないが、劣勢だという事は今までの戦闘から把握出来る。

だが、戻る事は出来ない。
例えるなら死出の旅だった……

鬼無神社
１０：３１

テレビで中継されている自衛隊とＷ．Ｃ．Ｕ．の交戦の様子はまるで一方的だった。
Ｗ．Ｃ．Ｕ．の未来の兵器との性能差は例えるなら太平洋戦争時の日本帝国主力戦車の「９７式中戦車（チハ車）」と現アメリカ軍主力戦車である「Ｍ１Ａ２　エイブラムス」だ。
ミサイルやバズーカで落とせないロボットの他、有り得ない機動の戦闘機や輸送機、厚い装甲すら貫通する武器やＳＦさながらのレーザー銃、果てには同時大量殲滅が行えるクラスター・ミサイルと来た。
この戦争の理不尽な戦いは例えるなら「素人を一方的に殴るボクシングチャンピオン」みたいな物だ。
これでは人類に勝ち目は無い。
三年前、俺達は何の為に戦っていたのだろうか？
未来は決まっていたのか？
だとしたら、未来はどう足掻いても破滅なのか？
クトゥルフやその眷属に喰われる運命が、未来から来た奴らに皆殺しか捕獲されるという選択肢に変わっただけなのか？
アナウンサーが伝える報道は見ていた人物を絶望させるには十分だった。
翼はマグカップに入った冷め切ったブラックコーヒーを一瞥し、深

い嘆息を漏らす。
「……らしくないな」
ジェイクの声に翼はブラックコーヒーを啜り、目の前の椅子に座ったジェイクを見据える。
翼もらしくないのは理解出来ていた。
だが、だからこそ考えてしまうのだ。
「……お前は未来は変えられる物だと思うか？」
「分からない。だが、変わったからこそ今が在るんじゃないのか？」
その返答にゆっくり頷くが「一理有る」と呟くがすぐに続けた。
「……俺はこう考えている。未来は決められていると……」
「笑えねぇ……」
「……まず聞け。俺達は役者だ。つまり、決められた未来に向かう為の役者なんだ。俺達は今の為にクトゥルフを倒したはずだ……」
「今の為？」
「……次は未来の為に戦う。それが俺達の役だからな……」
「役か……よし、決めた！」
翼はブラックコーヒーを一気に飲み干すと望の名前を呼んだ。
巫女装束の望が玄関から顔を覗かせると「何ですか？」と問い掛けた。
その可愛い顔を覗かせる望に心を和ませつつ、翼は力強い口調で怒鳴る。
「俺は自衛隊に……ＣＡＴＳに戻るぜ！」
「えええええええっ！？」
望は大声で驚きの声を漏らしたが動じない翼は玄関の近くの柱に掛けられていた鍵を掴み、その隣の南京錠の鍵を開けた。
かび臭いその匂いが翼にとっての興奮剤だ。
中央の机に無造作に置かれた膨らみのある白い布を取り払った翼はその下にある拳銃を見て口元を緩めた。
クトゥルフ事変の遺物とも言える物だ。
米軍の正式採用拳銃である「ベレッタ　Ｍ９２ＦＳ」の銃口を上下

にそれぞれ取り付けられ、弾倉を１５発から２０発に増やした「雷電」、デリンジャーとして開発された為小型で尚且つ銃口が４つある特異な銃「ＣＯＰ．３５７マグナム」を４発同時発射に改造した「霧積」、強化プラスチック製の大型拳銃「Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＳＰ」に３点制限点射とフルオート機構を備え付けた、翼が望に渡した、ある意味で最初のプレゼントとなった「漁火」だ。
そして、クトゥルフ事変後に新たに作られたライフル弾を用いるＦＮ社の拳銃「ＦＮ　ＦＩＶＥ－ＳＥＶＥＮ」に雷電と同じ改造を施した特殊拳銃「黒羽」が並んでいる。
ＦＮ　ＦＩＶＥ－ＳＥＶＥＮは特殊部隊にしか配備されないがＣＡＴＳのコネで入所した物だ。
まずは銃の整備だ。
翼が銃の整備道具を一式揃えたその時、望が駆け寄ってきた。
「どうして参加するんですか！？」
「クトゥルフ事変の時のように未来を掴む」
「未来を掴む？」
「俺は未来を変える為に、お前を救う為に戦った。今度は人類と子供達の未来を掴む為に戦うんだ」
翼が言うと同時に血相を変えたジェイクがいつもとは違う大声で怒鳴った。
「……東京に米軍が投入された！！」
「何だと！？」
翼と望がテレビに駆け寄るとＬＡＶ２５やブラッドレー歩兵戦闘車、ＡＨ－６４Ｄ　アパッチ・ロングボウが映っていた……

撤退

東京都
１０：２３

「味方だ！！無事か！？」
島の怒鳴り声に黒煙を上げる対空兵器の影にいた自衛官達が顔を覗かせる。
「見捨てられたと思ったぜ」
高射隊の一人が嘯くと補給を終えたコブラが戻ってくる。
「こちらシエラリーダー。高射隊との接触に成功。脱出の援護を頼む」
（チャーリー０２了解。上空から援護する。終わり）
吉良沢はその答えを聞くとＭ４Ａ１を掴んだ。
高射隊が随伴しようとしたその時、上空から轟音が轟き、敵性戦闘機が上空から向かってくるのが、太陽に重なってだが見えた。
一瞬だった。
敵性戦闘機のレールガンから放たれた弾丸はコブラを撃ち抜き、まるで吉良沢が彼らにしたようにコブラを吉良沢達の上に叩き落とす。
「逃げろ！」
吉良沢の声と同時に浅香と大野がその場から飛びのいたが、島や柊、高射隊の面々が巻き込まれ、コブラは爆発四散した。
周囲に散らばった肉片が誰の物かは分からなかったし、分かりたくない。
「クソッタレ！」
吉良沢は短ＳＡＭに駆け寄ると目視照準具を使い、敵性戦闘機を捉える。
ロックと同時に放たれたミサイルは白い噴煙を噴き出し、敵性戦闘機を追跡を開始した。

ミサイルは凄まじい速度で敵性戦闘機を追跡し、後ろに張り付くが敵性戦闘機も慣性の法則を無視する急加速からの急停止を行い、静止しながら素早くミサイルの方を振り向き、レールガンで撃ち落とす。
この有り得ない軌道に舌打ちすると短ＳＡＭから飛び降りて、届く訳の無いＭ４Ａ１を敵性戦闘機に向けて、乱射する。
三人が弾を撃ち尽くすと同時に敵性戦闘機が滞空しながら下部の兵器庫のハッチを開いた。
ミサイルの弾頭の丸いレドームが向いている。
終わりか……
吉良沢達が銃を下ろしたその時、上空から凄まじい速度でミサイルが急降下し、敵性戦闘機の上部を吹き飛ばした。
同時に「ＵＨ－６０　ブラックホーク」が三機降下してくる。
「ゴー、ゴー、ゴー！」
その声と同時にＭ４Ａ１やアメリカ軍が使用するＭ１６Ａ４を持った米海兵隊がブラックホークから降り、駆けてくるのが見えた。
海兵隊はあっという間に周囲に展開し、陣形を立てる。
良く統率された軍隊というのが浅香の感想だった。
「君達は生き残りか？」
鼻が高く、目が細い出で立ちで、ガッシリとした体形の隊員が口を開くと吉良沢は頷きながら英語で問い掛ける。
「あんたら、海兵隊か？見た所、フォース・リーコン辺りだと思うが？」
「そうだ。私はレイモンド・ソロモン大尉だ。君達の救出が任務だ」
「救出？ちょっと待て！どういう事だ！？」
「既に戦線は崩壊した。自衛隊に撤退命令が下り、我々は孤立した自衛隊の救出を大統領から命ぜられた」
「民間人はどうなる！？」
食ってかかったのは浅香だった。
浅香は少し甘いがゆえという面があるが、このような所はしっかり

している。
「民間人は殆どが捕獲された。奴らは軍人は殺し、民間人は抵抗する者以外全て捕獲してやがる」
「奴らの宣言していた奴隷にする、か」
「今は生き残る事が優先だ。急げ」
レイモンドは短く言い放つとブラックホークに乗り込み、海兵隊もそれに続いてヘリに乗り込んで行く。
「早くしろ！！」
レイモンドの怒鳴り声に動かされるように三人はヘリに乗り込んだ。同時にヘリが上昇し、その後ろを敵性戦闘機を落とした無人機「RQ－1　プレデター」が飛行する。
大敗とも言えるこの撤退に吉良沢は歯をギリと鳴らし、ヘリのプロペラの隙間に見える空を見上げた……

取り残された人々

地下鉄構内
１０：３３

息絶えた戦闘員の顔を見ながら、三人は恐怖した。
顔が全く同じなのだ。
顔や身体的特徴、その全てに至るまで同じであり、不気味の一言だった。
「あいつら、クローンとか言ってたよな？」
晃の声に裕紀もＷ．Ｃ．Ｕ．の三人の言葉を思い出す。
未来の技術でヒトゲノムが解析されたのなら有り得ない話ではない。
だが、それは同時に人間が神に等しい存在となったに等しいという事になる。
命が消えれば代わりを創ればいいという考えが生まれかねない。
命が軽視された瞬間、人間は「唯一の存在」から「道具」になってしまう。
それはあってはならない事だが、奴らの口ぶりから考えるに、人間を道具として見ているのは確実だ。
「うぅ……」
裕紀達はうめき声を聞き、そっちを見ると寝かせていた咲也がゆっくりと体を起こした。
「体が……痺れる」
咲也は途切れ途切れに呟くと、体を横たわらせる。
「んっ……私の……焼きそば……」
春香がよく分からない、寝言のようなものを呟いてる。
何の夢を見てんだ、コイツは……？
裕紀がげんなりと春香を見ると、ふらふらと立ち上がった咲也が怪訝な顔で天井を見上げた。

「何で急に静かになってるの？」
「えっ？」
そういえば確かにそうだ。
今まで上から聞こえていた銃声や爆音が聞こえない。
どういう事だ？
考えられる可能性は二つ、自衛隊が勝ったか、負けたか。
だが、各国空軍の様子を見た限り可能性が高いのは後者。
「ちょっと様子を見てくる」
「裕紀、俺も行く！」
裕紀と晃が全力で奥に駆けて行く。
考えられる可能性が当たっていたらと、どうしても最悪な方に考えてしまう。
二人は２００メートル程駆けて、ホームにたどり着き、はい上がる。
そして通路を駆け、階段を全力で上って見えた世界は誰もが知っている東京ではなかった。
空が黒煙で隠れ、半壊しているビルが並び、アスファルトが血で濡れ、薬莢が散らばり、銃痕や爆発跡が穴を開け、そして目の前には黒焦げの自衛隊の車輌とばらばらの肉片があり、それは地獄と言うに相応しい。
「何だよ……ここは……」
「東京……だろ？」
晃の問いに答えた裕紀。
二人は同時に顔を見合わせる。
こんな短時間で首都が壊滅するなんて魔法か悪い夢としか言いようが無い。
だが、これは未来の科学の力による物で、全て現実だ。
「有り得ない……」
裕紀が小さく呟いたその時、ホームの影から戦闘員が飛び出してきた。
殆ど不意打ちに近い為、反応が出来なかった二人の目に地下鉄で見

たレーザーピストルが映る。
武器は何も無い。
ヤバイと思ったが体が反応しない。
その時、銃声が轟いて戦闘員の装甲服から火花が飛び散り、戦闘員が体をのけ反る。
二人が同時に入口前を向くと、黒焦げの車輌を支えに、右手でＳＩＧ　Ｐ２２０を構えた自衛官が立っているのが見えた。
刹那、もう一人、軽機関銃を持った自衛官が飛び出してくる。
「伏せろ！！」
軽機関銃を持った自衛官の怒鳴り声に反応した二人は咄嗟に地面に伏せた。
それより遅いか早いかのタイミングで自衛官は軽機関銃から放たれる５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾を戦闘員にこれでもかと言わんばかりに撃ち込む。
装甲服は穴だらけに、文字通り蜂の巣に変わった。
自衛官は手際良く弾倉を交換し、箱型弾倉を軽機関銃に取り付け、二人を見る。
「怪我は無いか？」
「大丈夫です」
「俺は島二等陸尉、こっちは柊陸曹長だ。君達は？」
島はＭＩＮＩＭＩ軽機関銃を肩に担ぎながら言うと、裕紀が答える。
「自分は裕紀、こっちは晃です。何があったんですか？」
「分からん。俺達は爆発に巻き込まれ、運よく生き残ったが気絶している間に仲間は撤退したらしい」
「運よくないじゃん」
「……晃？それは俺達にも言える事だから」
晃の人事のような一言に突っ込みを入れた裕紀は島に問い掛ける。
「この後はどうするんですか？」
「救援を呼ぶにも無線がイカレてる。自力で脱出するしかないみたいだ。君達の他に誰かいるか？」

「中に三人。友達だ」
「分かった。取り敢えず、彼らと合流だ。これを持っておけ」
島は近くに落ちていた８９式小銃を二丁、二人に投げて寄越した。
「初心者は撃つ時にこの３と書かれたスリーショットバーストに合わせろ。一度引き金を引けば三発だけ発射されるから弾を無駄にしない」
「分かりました。案内します」
８９式小銃を持った裕紀と晃の後ろを島と柊が駆けていく。
戦場となった東京を背に……

世界反抗協同連合軍

W．C．U．対策室「老神島」
１２：４８

「自衛隊、米軍の撤退が完了。民間人の東京からの脱出は２０％は成功したものの、過半数は死亡、或いは捕獲されました。今も東京には民間人が取り残されています」
瀬川の発表に各国首脳陣が唸る。
まるで犬のように……
歴史上最大規模の連合空軍がたった三機にほぼ壊滅、陸上自衛隊も相手に損害を与えられないまま撤退。
これでは各国軍も同じだ。
「ここで私に提案がある」
アメリカ合衆国大統領がその唸り声を掻き消し、大声で口を開く。
暗い室内にモニターで照らされた大統領は立ち上がり、その影が壁に大きく映る。
「今こそ各国が力を合わせて戦う時ではないだろうか？先人達が築き上げた文化をここで途絶えさせる訳にはいかない。そこで私は全世界の連合軍の設立を提案したい」
通常なら有り得ない提案だったが、会議室に拍手が響き渡った。
各国首脳陣が同様に勝てないという見解を持った結果だろう。
各国の民族間対立や歴史的嫌悪感よりもW．C．U．の方が危険と判断した首脳陣の拍手は鳴り止まない。
「ここに世界反抗協同連合軍の設立を発表する」
大統領の声は会議室に響き渡り、賛美の声が上がった。

鬼無神社
１４：１１

最後のネジを締め、銃の調整を終えた翼はクトゥルフ事変以前からの愛銃「雷電」を構えた。
手にしっくりくるグリップの感触を再確認すると、右人差し指で銃を回し、左手で、新しく作られた銃口を上下に取り付けた「ＦＮ ＦＩＶＥ－ＳＥＶＥＮ」を原形とする改造拳銃「黒羽」を構え、雷電を交差させる。
一生使わないと思っていた銃をまた使う事になるとは……
黒羽は理論的には雷電と同様の仕様の為、弾詰まり「ジャム」は少ないはずだ。
また、ライフル弾を使用している為、貫通力も高い。
しかし、試し撃ちしていない為、どのような弱点があるか分からないのが実状だ。
が、そんな余裕が無いのが現実で、いきなりの実戦投入となり不安も多少ある。
「ま、大丈夫だろ」
翼は楽観的に呟くと「おい」と野太い声が聞こえてきた。
振り返った翼の目にクトゥルフを葬った日本刀「鬼首（おにこうべ）」を持つ飛鷹が映る。
「望さんから聞いたぞ。自衛隊に戻るんだってな？」
「ああ」
「せっかく、腰を落ち着けたと思ったのにな」
残念そうに呟く飛鷹は手に持った鬼首を投げて渡した。
ガチャという音が鳴り、ずしりとした懐かしい感触が腕を伝う。
鬼首――かつて翼の先祖が鬼を退治し、その首を切り落とした事からこの名前が付けられた日本刀だ。

鬼の血が染み込んだような深紅の刀身の切れ味は異常とも言える程で、クトゥルフ事変以前の作戦では敵対したタスクフォース隊員のナイフの刃を切った程で、数百年も前に作られた物とは思えない。
また、決まった倒し方や圧倒的な火力が必要な特殊生物「Ａｎ　Ｂｉｏ　Ｔｈｉｎｇｓ」、通称「ＡＢＴｈ（アビス）」に唯一正攻法で倒せる武器であり、現代火器で倒せなかったクトゥルフを倒した武器だ。
「望さんやサイファーさんも行くと言っていた……」
ジェイクはともかく望まで？
望は子供達の為にも連れて行きたくなかったのだが……
翼が望を説得しようと立ち上がったその時、飛鷹の手刀が翼の頭に一撃を叩き込んだ。
「何だよ！？」
「お前の背中を守るのは自分だって聞かなかったよ、望さんは……」らしいな……
「さて、今日はご馳走だ！！派手に作るぞ！」
飛鷹は大声で怒鳴り、豪快に笑った。
もしかしたら、実の息子との最後の晩餐になるかもしれない。
空元気にも似た笑い声はどこか虚しく響き、飛鷹の目に涙が浮かんでいる事は誰も気付かなかった……

開幕

東京都地下鉄構内
２１：５８

取り残された七人は線路に腰掛けながら俯いていた。
戦場の緊張感とプレッシャーは素人のみならず、自衛隊にも苦だ。
喋る気力すらも無くなった彼らの沈黙を破ったのは島だった。
「脱出を試みよう」
その声に六人は俯いたままの島を見た。
ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃を肩に担ぎながら立ち上がった島は全員を見渡しながら口を開く。
「何もやらない事はどんな事よりも危険だ。俺はここで死ぬつもりは無い」
「どうするんだよ？」
晃の問い掛けに島はＭＩＮＩＭＩ軽機関銃に初弾を装填し、地下鉄に響くような声で答える。
「ラジオだ！」
「ラジオ？」
春香の素っ頓狂な声に島は頷く。
「ラジオなら誰か聞いている可能性がある。ラジオ局を使って助けを求める」
「成る程……ラジオなら誰か聞いていてもおかしくない！」
裕紀も力を取り戻したように立ち上がった。
「でも誰も聞いてなかったらどうするの？」
「芹沢と言ったな？やらなければならない時もある。それが今だ」
島は大声で怒鳴るとＭＩＮＩＭＩを一射した。
凄まじい轟音と薬莢が落ちる音が響き渡り、島が怒鳴る。
「参加の是非を取りたい。戦力は一人でも多い方がいい。だが、無

理強いはしない。参加する者は立ってほしい」
その声に真っ先に立ち上がったのは柊だった。
元々彼の隊の出身の柊にとっては当然の答えだ。
そこで終わると思っていた島の目に映ったのは立ち上がった裕紀だった。
裕紀の瞳には確固たる決意が浮かんでいる。
「奴らに捕まって死ぬまで奴隷として暮らすなら、俺は死ぬかもしれないが自由を勝ち取る可能性がある方を選ぶ。晃、お前もいいのか？妹の為にもここで立つべきだろう！」
裕紀の一言に晃はゆっくりと立ち上がる。
「そうだな。死ぬのも奴隷になるのも勘弁だ」
「私も行きます！」
千尋も素早く立ち上がり、大声で言う。
彼女なりの決心だったのだろう。
「私も行くよ！助かるなら早い方がいいからさ」
春香も笑顔で答えると、座っていた咲也も立ち上がる。
「仕方ないな……一人で生きていける訳ないしさ？」
咲也は皮肉混じりと言っても、満更ではない。
「決まったな。明日の〇八〇〇時に行動を開始する。それまでは休息だ」
島の声と同時に全員の多種多様な声が地下鉄に響き渡った……

４月３日
鬼無神社
０５：０１

夜が明けた頃、いつもは静寂に包まれた神社を切り裂くヘリの轟音。
凄まじい風が木葉を吹き飛ばし、ヘリはゆっくりと降下してくる。
陸上自衛隊多用途ヘリコプター「ＵＨ－６０ＪＡ」が降下する。
神社に降下したその迷彩色の機体から飛び出した女性は神社に歩いていく。
髪を金髪に染め、ストレートのサラサラの髪に、鋭い目付きだが顔形が整い、涼しい美人の女性は「桐生」の表札を一瞥し、玄関に手を掛けた。
しかし、それより早く玄関が開く。
「久しぶりだな、霞さん」
「そうだな」
男勝りな口調で返した霞儚（かすみ はかな）は頬を緩ませた。
「決断してくれてありがとう」
「あんたらにカッコイイ所は渡したくないからな」
翼は何気なくヘリのコックピットを見るとヘルメットにサンバイザーを付けていた男性がバイザーを上げた。
見覚えのある顔に翼は笑みを浮かべる。
小西勇作（こにし ゆうさく）だ。
彼も元ＣＡＴＳのヘリパイロットで未知生物処理隊の隊員だった。
さらにヘリから二人の男女が降りてくる。
男の方は糸目で無精髭が生え、髪を短く切り揃え、女の方は二重で鼻が高い美人でセミロングの茶髪だ。
「こちらは？」
翼の問い掛けに男が笑みを見せ、敬礼する。
「自分は元自衛官の佐藤耕一（さとう こういち）だ。階級は二等陸曹だから君の方が上だ」
「私は佐藤和葉（さとう かずは）三等陸曹」
「コイツらは中央情報隊から未知生物処理隊で私や入谷とともに戦った仲間だ。今は結婚して退役した。お前達と同じだ」
「よろしく」

「ああ」
翼は耕一の手をガッシリと掴む。
「今からヘリの中でブリーフィングだ」
ブリーフィングか……懐かしいな
今から戻るのか……
翼は空を見上げるとニッと笑う。
同時に望とジェイクが家から出てきた。
さて……開幕だ。

逃避

東京都地下鉄入口
０７：５９

静寂の広がる街。
今からその静寂が破られる。
銃声によって……
「今から作戦を開始する。先頭は俺、殿(しんがり)は柊だ。間にお前達が入れ。止まるなよ！」
島の腕時計が八時を告げた。
そのアラームを止めると島は駆け出し、その後ろを裕紀、咲也、千尋、春香、晃と続き、最後尾に柊が続く。
それぞれの武器は８９式小銃と柊の８９式小銃を裕紀と晃と咲也、島と柊が使っていたＳＩＧ　Ｐ２２０を千尋と春香が使っている。
島と柊は無駄の無い動きだが、五人は周囲を見渡しつつ、島の後ろを駆けて行く。
手筈はこうだ。
まずはトラックなり乗用車なりを見付け、１２ｋｍ先のラジオ局に向かう。
口で言うのは簡単だが、ここに熾烈な攻撃が加わる。
さらに移動手段がなければ最悪、徒歩で行く事になるのだ。
そんな状況なんて戦争以外に有り得ない。
元より日本でそんな状況が起こるはずも無いのだが……
咲也は後ろで息を切らす音が聞こえ、振り返ると千尋が苦しそうに息をしている。
まだ５００ｍを行った程度だが、元々運動が苦手な千尋には苦になる距離だ。
「大丈夫？」

「だ……だい……じょうぶ……」
息を切らした千尋は途切れ途切れに答えるが、今にも倒れそうだ。
「ちょっとペースを緩めない？」
「馬鹿野郎！！ここは戦場だ！そんな余裕があると思うか！？」
「でも……」
「急げ！！」
島が怒鳴ったその時、機械の音が響き渡った。
ここはビルに囲まれた繁華街で現れるとしたら正面の曲がり角。
「敵歩行兵器が来る。物影に隠れろ」
島の声を聞いてごみ箱や瓦礫に隠れた六人の前に現れたのは巨大なロボットではなく、まるで筋肉が剥き出した人間だ。
が、剥き出しているのは筋肉ではなくコードや回路であり、映画の「ターミネーター」シリーズのシュワルツェネッガーが演じるターミネーターの皮膚が剥げた物に酷似している。
唯一、頭が皿のような円盤上である事以外はそっくりだ。
円盤の中央には赤く光る目が付いていた。
敵はゆっくりと歩みを進め、こちらに向かってくる
ガシャという軋む音が近付くに連れて全員の額に汗が滲む。
ここで交戦したなら銃声で居場所が敵に露見する。
それだけは避けなければならない為、迂闊に手出し出来ない。
敵はゆっくりと裕紀達が隠れている場所を通り過ぎていく。
赤い目がゆっくりと左右に動き、獲物を探す様は一言恐怖だ。
コイツは敵を探し、殺そうとしている。
つまり、俺達を……
ゲームなら見付かって死んでも、リセットすればそれでいい。
しかし、これは現実。
リセットなど有りはしない。
裕紀が無事に過ぎる事を願ったその時、こちらに向かってくる音が聞こえてきた。
それは兵器の音でも、銃声でもなく車のエンジンの音だ。

それも複数。
島達が来た方向の角を曲がって現れたのは陸上自衛隊の高機動車（ランクル）が３輌だった。
敵兵器が右腕をランクルに突き出すと、右腕が光だし、肘と手首の間からグレネードランチャー程の銃口が迫り出す。
空気が擦れる音が一瞬聞こえたと同時に先頭のランクルが一台吹き飛んだ。
その爆発に巻き込まれて、続く一台も爆発する。
さらにその爆発で前が見えなかったのか、最後尾のランクルはスリップしつつ、ビルに激突した。
同時に後ろに乗っていた少女が投げ出され宙を舞う。
「危ない！」
反射的に動いたのは咲也だった。
敵がいるのも忘れて飛び出したのを見た島は舌打ちし、ＭＩＮＩＭＩを構え、引き金を引く。
それが合図となり、弾丸は一斉に敵に注がれる。
敵は火花を散らし、多少のけ反るものの、びくともしない。
敵兵器はゆっくりとこちらを向くと、左腕から同様に、今度はチェインガンを小型化したような銃を向ける。
同時に手が光だし、これもレールガンの一種だと理解した六人は急いで散開し、同時に凄まじい速度で弾丸が次々吐き出された。
電磁誘導で加速された弾丸は瓦礫を粉砕し、粉々にする。
これでミサイルを落とそうという計画があっただけあるという物だ。
裕紀が撃ち尽くした弾丸を装填し、横目で咲也を見ると無事に受け止められたらしく、少女の下敷きになっていた。
これを受け止めたと言うかは別にして、裕紀は一先ず安堵する。
しかし、柊の「危ない」と言う声に前を見ると、チェインレールガンがこちら向いていた。
殆ど這うように走った裕紀のすぐ横や真上、手前に弾丸が弾着し、土煙が舞う。

そして滑り込むように飛び込んだビルの看板の断片に、穴が一個開いて銃撃が止む。
「危ねぇ……」
裕紀が開いた穴から様子を伺うと銃身から湯気が上がっている。
それはまるでオーバーヒートのようだ。
その時、敵兵器の足元に手榴弾が転がり、爆発する。
硝煙の匂いが周囲に立ち込め、全員が顔を上げると崩れ落ちた敵兵器があった。
目の赤い光が消えている事から恐らく、活動は停止しているらしい。
「終わったか？」
晃が呟いたその時、島が「ボヤボヤするな」と叫び、ランクルに駆け寄る。
運転席の自衛官は血を流して息絶えていた。
恐らく、同じように逃げていた所でこうなったのだろう。
フロント部分が歪んでいるが問題無く動くようだ。
「早く乗れ！」
島が自衛官の体から使える物だけを取って、降ろすと手を合わせる。
そしてランクルをバックさせると、六人と気絶した少女の前に停車した。
「裕紀、晃、手を貸して」
咲也は少女の頭を膝に乗せながら口を開く。
少女は人形のように美しい顔立ちは黒髪のロングヘアで、束ねた一房を右に垂らしている。
裕紀と晃は急いで駆け寄り、その少女を抱えてランクルに乗せた。
同時に千尋と春香が荷台に、柊が助手席に乗り込み、三人が乗り込むとランクルは発進していった……

宣言

ＵＨ－６０ＪＡ機内
島達行動中同時刻

久しぶりの面子を見渡しながら、霞は口を開いた。
「久しぶりの面子だな。懐かしい……」
「そうだな。とは言っても君達とは初顔合わせだな」
耕一は翼や望、ジェイクを見渡す。
初顔合わせの隊員同士では最悪統率が取れない場合がある。
仲間との相性、組み合わせが作戦を左右する場合だってあるのだから……
「俺はそうだな……ユーモア担当？」
翼が嘯くと耕一と和葉が目をしばたたかせた。
「そうなの？」
和葉の問い掛けに二人は躊躇無く頷く。
それを見て、翼はホルスターの二丁拳銃を見せた。
特異な形のその拳銃はまるで映画の主人公等が使うプロップガンのようだ。
撮影の為に作られる銃器をプロップガンと呼ぶのだが、本来の目的は所詮撮影用、実用は有り得ない。
故にそれを持ち込む事など常人が考える事でもない。
「私は突っ込み担当です」
望も翼と同様のノリで答える。
とは言っても三年前にはだいたいそんなポジションではあったが……
「……マジシャン担当……」
ジェイクの小さな呟きに耕一と和葉はもはや突っ込む気にもならないようだ。
ましてや昔はマジシャンと言われて激怒した人物が今はそれを誇り

のように言っているのもおかしい話だ。
時間とは恐ろしい。
「と言う訳で、実力は戦場で！」
翼が親指を立てると、耕一と和葉が苦笑した。
その時、ヘリを操縦していた小西が無線の異変に気付き、叫んだ。
「何か拾いました！」
拾う……つまり、無線を傍受したと叫んだ小西に飛行中でありながら六人はコックピットに駆け寄った。
ノイズ混じりに聞こえる声は……
W．C．U．の当主「ウィルコック」だった。
（私……ウィルコック……東京はかんぜ……占拠した……次の目標……アメリカ……だせいぜい足掻……いい……原始人供！！）
恐らく全世界で同様の放送が成されているだろう。
次の目標はアメリカ……
世界最強の軍隊とも評されるアメリカ軍を倒すと言うか？
だが、有り得ない話ではない。
各国空軍を破り、東京を占拠したW．C．U．軍なら有り得ない話ではないのだ。
「霞さん、目標は？」
「東京！まずは敵の手の内を知る」
霞は怒鳴ると翼はニッと笑った……

追撃

東京都某所
０８：１２

車のエンジンと振動が伝わる荷台に揺られていた裕紀は少女を一瞥する。
セーラー服の胸ポケットに入っていた身分証明書には板宮（いたく）中学校三年生「神谷楓（こうやかえで）」の文字があった。
彼女も取り残された民間人の一人だろう。
今回の戦争ーーー第三次世界大戦は、民間人を巻き込んだ第二次世界大戦の総死傷者数の約６０００万人を越す可能性さえ考えられる。
一方的かつ、圧倒的なこの戦争は最低の戦争と言えるだろう。
「畜生……」
聞こえるか聞こえないかの声で呟いた裕紀は外を眺めた。
このまま逃げ出せても、自分達が生き残っても、死んでも、戦争は終わらない。
ただ、激化するだけだ。
外から見えるＷ．Ｃ．Ｕ．の本社艦「アポカリプス」はゆっくりと移動している。
無線付きランクルから聞こえたアメリカへの攻撃宣言。
恐らく、空軍の時と同じように各国軍はアメリカでの決戦に備えて戦力を結集しているだろう。
しかも、守勢に廻っている世界反抗協同連合軍、通称「ＷＲＣＡＦ（ワーカフ）」は敵の弱点を知る事が無い限り、攻勢に廻る事はない。
故に現状での救援は自衛隊しか望めないというのが現実だ。
「うぅ……」
少女ーーー楓は呻くとゆっくり目を開けた。
驚いて駆け寄った学生五人を見た楓は恐怖と驚きで後ろに退き、ラ

ンクルに詰んでいた陸上自衛隊初の国産サブマシンガン「９ｍｍ機関拳銃」を五人に向けて「来るな！！」と怒鳴る。
無理も無い。
いきなり車から投げ出されて、気絶している間に誰か分からない人達と乗っていれば誰だってそうなるだろう。
「大丈夫、俺達は味方だ」
弁明する裕紀に「黙れ！」と叫んだ楓は９ｍｍ機関拳銃の引き金を引いた。
しかし、カチリという、弾が入っていない銃独特の音が聞こえる。
弾倉を探す楓を見た咲也は「これを探してる？」と三本の細い弾倉を持ちながらヒラヒラとそれを動かす。
それを見た楓は咲也を睨み付ける。
「クソ！！お前達も奴らの仲間か！？ボクを捕まえて他の仲間みたいに首輪を付けて奴隷にする気か！？」
「だから俺達は……」
晃が怒鳴ったその時、ランクルが大きく揺れた。
凄まじい衝撃と土煙が荷台まで入ってくる。
目に土煙が入り、涙が溢れてきた。
裕紀が荷台の布から後ろを覗くと、敵の羽の無い、垂直離着陸戦闘機のようなヘリコプターがこちらを狙っていた。
「敵だ！」
「分かってる！！」
裕紀の怒鳴り声に運転をしていた島の声が微かに聞こえてきた。
撃ち落とさなければやられるのは明白だ。
裕紀と晃、咲也は８９式小銃を構えると追跡してくる敵ヘリに向けて弾丸を撃ち込む。
無論、ヘリの装甲を、ましてや未来の兵器には５．５６ｍｍ弾は通用するはずもない。
「カール・グスタフを使え！」
島の声に裕紀と咲也は素っ頓狂な声を漏らした。

「カー……何？」
「一般人に専門用語が通じると思ってる！？」
撃ちながら怒鳴っている二人とは違い、晃は８４ｍｍ無反動砲こと「カール・グスタフ」を掴んだ。
「カール・グスタフってバズーカの事！？」
「あ～……バズーカってのは他の砲の愛称だけどな。砲はバズーカのイメージってどっから来たんだろ？」
晃は苦笑しながら弾丸を込めて構える。
スコープを覗き、中央に捉えられた兵器に弾丸を放った。
凄まじい勢いで放たれた弾丸だったが、移動中の時はまず当たらない。
「畜生！」
晃は怒鳴って、再び弾丸を込める。
刹那、ヘリからロケット弾がランクルの後ろに撃ち込まれ、三人は爆風で後ろに吹き飛ばされ、ランクルの壁に叩き付けられた。
その時、楓がカール・グスタフに取り付き、構える。
小柄な少女が無反動砲を構えるのが異様で、滑稽さえ見えた。
しかし、数秒後にその滑稽さは掻き消える。
放たれた弾丸が見事にヘリを叩き落としたのだ。
回転しながら落ちていくヘリはランクルの後ろに墜落し、爆発した。
「よく当てたな？」
感心する晃に楓は無言でカール・グスタフを投げて渡すとランクルの壁に腰掛けた。
その時、島が叫んだ。
「そろそろだ！！気を引き締めろ！」
ランクルのフロントガラスからはラジオ局が見えた。
賭けの始まりだ……
吉と出るか凶と出るか……
それは分からない。
分かる事はやらなければ生き残れないという事だけだった……

ゴスペル隊

老神島
０８：１５

会議室のような部屋に通された佐伯と瀬上は同様に先に通されたであろう三人を見た。
三人ーーー彼らはアポカリプス撃墜作戦「ホーネットネスト」において３０７飛行隊こと「エルボー隊」と行動を共にした三機の戦闘機パイロット達だ。
ホーネットネスト終了後に帰還した彼らは少し顔を見た程度で今回が初顔合わせとなる。
「Ｓｕ－３３　フランカー」を駆っていたロシア人のイリア・リューベック大尉。
「トーネード　ＩＤＳ」を駆っていたドイツ人の傭兵、エレン・リーゼ元中尉。
「Ｆ／Ａ－１８Ｅ　スーパーホーネット」を駆っていたアメリカ人のガルム・メイトリクス大尉。
彼らは新たに編成された世界反抗協同連合軍「ＷＲＣＡＦ」空軍として集められたのだ。
世界初の全世界連合軍の再編成に関して、当然知らない人間と組む可能性だってある。
その場合、何らかの形で組んだ人物で編成するのが最も好都合であり、合理的なのだ。
椅子に座った五人の前に制服姿の男性が立ち、口を開く。
「用件は聞いているだろう。君達はＷＲＣＡＦ空軍に再編成される。所属は第７航空団第７７飛行隊。通称『ゴスペル隊』。隊長等の人選は任せる」
そう言って制服姿の男は会議室から出て行った。

ホーネットネストから運良く「大当り（ジャック・ポット）」となった為に「７７７」か。
面白いと佐伯は苦笑する。
最初に口を開いたのはメイトリクスだった。
「隊長はどうするんだ？階級は三人が大尉だって言うじゃねぇか。何なら俺が隊長をやってもいいぜ」
親指を差して大口を叩く姿に流石と思ってしまう。
その時、甘いマスクに金髪オールバックのリューベックは嘲笑する。
「君達は世界最強の軍隊と言っても落とされて、落とせなかったじゃないか。いつでもヒーローに成りたいのはアメリカらしい」
「何だと！？」
メイトリクスは腕を捲り、リューベックの胸倉を掴んだ。
顔を真っ赤にするメイトリクスと顔色一つ変えないリューベック。
ここで冷戦を起こすなと叫びたかったが、それを押し殺し、佐伯は二人の間に割って入った。
「落ち着け。まずは話し合いで……」
「いや、佐伯大尉。僕は君を推薦したい」
胸倉を掴まれながら、リューベックは佐伯を見る。
「何でこの若造を推薦するんだ？ウォッカ野郎！？」
メイトリクスはリューベックをグイと引き寄せ、顔を近付ける。
「彼はＷＲＣＡＦがシリアルキラーと名付けたＷ．Ｃ．Ｕ．の戦闘機を単機で撃墜している。各国空軍が多数やられた戦闘機にね。それが推薦の最大の理由だ。それに彼はクトゥルフ事変の生き残りだ」
「だから何だ！」
「君の脳は筋肉か？」
「何だと！？」
メイトリクスが拳を振り上げたその時、リーゼが割って入り、その拳を受け止めた。
「ガキは喚くか殴るしかないか？」
リーゼは女性ながら傭兵であり、その声音は殺気すら感じられる。

「あんたもあんただよ！喧嘩するなら表でやりな！！」
リーゼの声にメイトリクスは舌打ちしてからリューベックを突き飛ばし、椅子に荒々しく座る。
それを見てリューベックは衿元を正しながら立ち上がった。
「クトゥルフ事変、あの忌まわしい悪夢を終わらせたのはキリュウと呼ばれる人物だが、その彼が来るまでの時間を稼ぐ事に最も貢献したと言われているのが彼なんだよ」
「何だって！？」
驚くメイトリクスと平静を装っているが驚きを浮かべているリーゼ。
同時に瀬上が口を開いた。
「佐伯一尉は訓練においてもトップクラスの成績です。私も彼が適任かと思います」
「俺は……」
「それなら仕方ねぇ。俺も同意してやる。だがな！」
メイトリクスは怒鳴るとリューベックを睨む。
「貴様だけは認めねぇからな」
メイトリクスは怒鳴ると煙草を取り出した。
とんでもない部隊に大化けするか最低の部隊になるか……
それは誰にも分からない……

再来

東京都某所
０８：３１

七階建てのビルと電波塔が合わさった特異な形の建造物。
ラジオ局の前にランクルが止まり、最初の七人と楓の計八人が降りてくる。
「ここだな？」
島がＭＩＮＩＭＩ軽機関銃を肩に担ぎながら呟くと、柊が地図を確認すると「間違いありません」と答えた。
武装は８９式小銃が三丁、９ｍｍ機関拳銃が二丁、９ｍｍ拳銃こと「ＳＩＧ　Ｐ２２０」が五丁、ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃とＭ２４狙撃銃、カール・グスタフが各一丁。
弾薬はランクルに充分な量が積まれていた為心配は無い。
「人選を考えると、柊は中、俺がここを守るのが適当だな」
「そうですね」
柊はＭ２４から９ｍｍ機関拳銃を持ち替える。
「柊には如月、荻野、神谷。残りはここで待機だ」
「聞きましたね？ついて来て下さい！」
柊の声に呼び出された裕紀と春香、楓が武器を持ち、中に入っていく。
裕紀が初弾を装填しながら中に向かうと千尋が心配そうに裕紀の名前を呼んだ。
「裕紀……」
振り返った裕紀に、千尋は小さな声で「帰ってきてね」と呟き、裕紀は笑顔を見せると、親指を立てて奥に歩いて行った……

ラジオ局の中に入った裕紀達は周囲を見渡した。
散乱した書類や落下した蛍光灯の破片が混乱があった事を仄めかす。
だが、異様なのは壁に血が飛び散っているのだ。
単に血が飛び散っているだけなら戦場では普通であるのだが、その血の量が尋常ではないのだ。
まるで赤いペンキを壁に塗りたくったかのようだ。
「何だ、こりゃ？」
裕紀は血生臭いその匂いに顔をしかめる。
血生臭い匂いは吐き気を催す程だ。
「まるで虐殺の後ですね」
腕で顔を覆った柊は舌打ちをするがゆっくりと奥に進む。
「うぅ……気持ち悪い……」
顔を青くする春香は怠そうに歩いて行く。
「大丈夫か？」
「う～……正直辛い……」
「しかし、何なんでしょうかね？」
「……グール」
「「えっ？」」
最後尾にいた楓の呟きに三人は思わず振り返った。
楓の声はひどく怯えているようだ。
グールとはアビスの一種だ。
日本における最初のアビス事件となった「富士樹海惨殺事件」の犯人である。
食屍鬼の異名を持つグールはその名前の通り、人を喰らう。
また、その外見はゾンビのように悍ましいのも特徴だ。
富士樹海惨殺事件において、登山客や警察官、投入された自衛隊をも食い殺している。

基本的に人海戦術だが、十分な火力が無い場合や狭い室内、樹海等の見通しの利かない場所においては非常に危険な相手だ。
しかし、アビスは三年前のクトゥルフ事変の際に現れた「クトゥルフ」とその眷属「アポーン」を最後に現れていない。
「アビスは三年前に駆逐されたはずだ」
「だが、ボクは確かに中学校で奴らに襲われた。悲鳴と断末魔、血の匂い……忘れもしない……」
楓は小さく、震える声で言う。
有り得ない物はW・C・U・だけで十分だ。
だが、その中で現れたアビスの再来は……
「神谷さん、間違いないのですか？」
「ボクの父はCATSの隊員だったから、それは見てる。父は人に教えちゃ駄目だって言ってたけど……だけど、違うのは額に何か赤く光る物が付いていた」
「赤く光る物？」
グールにはそのような物は無いはずだが……
その時、裕紀が思い出したように口を開いた。
「そもそも……ずっと気になってたんだが、奴らは未来から来たと言っていたよな？」
「言ってたね」
「タイムパラドックスって無いのか？」
「えっ？」
「未来から来た人間が親や先祖を殺し、未来が変わる事だよ。親殺しっても言われてる」
「聞いた事はあるけど……」
歩きながら呟いた春香を裕紀が一瞥する。
「人類がクトゥルフを倒して未来を変えたからアビスが現れなくなった。だが、未来から過去を攻撃したら、自分を否定する事になる。奴らは何故こんな事を？」
「歴史とアビスの談義は後です。今は救援要請が先です」

柊の声に全員が頷くと階段を駆け上がって行った……

現れた地獄供

ラジオ局内部
０８：４９

血生臭い匂いと時折聞こえる物音が不気味さを醸し出している。
仮にグールがいるなら物音の主はそれだろう。
お化け屋敷にいる感覚だが、このお化けは人を襲って生きたまま喰らうのだ。
裕紀は８９式小銃を持ちながら歩いていると上の階からの物音に体を硬直させた。
物音に敏感になっているなと我ながら自嘲しつつ、裕紀は歩みを進める。
「私苦手だよ……お化け屋敷なんか特に……」
「万が一の時は撤退します。なので女性は最後尾に……」
柊が言い終わるかのタイミングで柊の横の扉が勢いよく開いた。
そこから飛び出してきたのはミイラとゾンビを足して二で割ったような外見の化け物だ。
凄まじい唸り声が不気味で、柊の鼻を腐臭と血の匂いが突き抜ける。
その凄まじい力で壁に叩き付けられた柊に噛み付こうとするグールは歯をカチカチと鳴らす。
柊は辛うじてグールを押さえ付けているが、グールの力は凄まじい。
「誰か！撃って下さい！！」
柊の叫び声に裕紀は８９式小銃をセミオートに変えて、頭に狙いを付ける。
激しく動くが、近距離なら撃ち損じる事はまずない。
肩付けで構え、引き金に指を掛けた瞬間、グールがこちらに向かって吠えた。
驚きと反射で引いた引き金は８９式小銃の銃口から弾丸を飛び出さ

せ、グールの眉間を撃ち抜き、赤黒いゼリー状の物体を床に撒き散らす。
先程とは打って変わって力が抜けたグールの死体を床に押し倒した柊は代わりに床に落ちた９ｍｍ機関拳銃を拾いあげた。
「助かりました」
「いえ……しかしこれは……」
「アビスです」
柊は真顔で答えると頭部を見た。
弾丸で撃ち抜かれた眉間には通常のグールには無いものだ。
グールの頭に取り付けられた、赤い大振りの宝石のような機械は中央に穴が開き、火花を散らしている。
「私自身アビスを見るのは初めてですが、この頭部の機械は前例がありません。神谷さん、貴女が見たのはこのアビスですか？」
「間違いない。確かにコイツだ」
楓はグールの死体を見下ろしながら小さく呟いた。
床に撒き散らされた赤いゼリー状の物体は吐き気を催す程の悪臭を放っている。
まるで魚が腐っているかのような匂いだ。
「あと何体いるんだ？」
裕紀は鼻を腕で隠しながら言うと、真正面の階段から足音が響いてきた。
素足で人が歩くような音が……
四人が身構えると想像通りの物が現れた。
グールだ。
数は１０体。
口元が血で濡れている事から考えると犠牲者を食べていたという事だ。
恐らく先程の銃声で新しい餌が来た事に気付いたらしい。
そしてやはりというべきか、奴らの頭部にはやはり赤い機械が埋め込まれていた。

「畜生！！湧いてきやがった！」
「総員、戦闘準備！！」
柊の怒鳴り声に全員がほぼ同時に銃を構える。
「撃て！！」
グールの唸り声と銃声が混ざり、周囲に轟いた。
弾丸がグールの体を貫くが、頭部以外はまるで効いていない。
かつてＣＡＴＳのメンバーがこの化け物と戦っていたかと思うと感心してしまう。
「手榴弾行きますよ！」
柊は手榴弾のピンを抜くと、相手との距離を計りつつ、カウントする。
この行為は敵に投げ返されないように爆発させる為でもあり、的確に敵を巻き込む為だ。
三秒後に投げられた手榴弾は十メートル先のグールの群れに投げ込まれ、一秒も経たずに爆発した。
しかし、グールは構わずに煙の中から飛び出して来る。
爆発の影響を受けずに迫ってくる者、手がちぎれた者、足が裂傷して這いながら向かって来る者……
殆どホラー映画だ。
「後退！！」
柊の怒鳴り声に全員が後退するが、グールは距離を縮めてくる。
ＣＡＴＳがえり選りの隊員で構成されているのも頷ける。
素人や一般隊員では、最も対処がしやすいと言われるグールですら強敵だ。
弾幕を切らせば近付かれるが、弾切れは必然。
距離が詰められるのも時間の問題だ。
「喰われてたまるか！！」
裕紀は８９式小銃に０６式小銃擲弾を装着し、天井を撃ち抜く。
しかし、無謀とも言えたその行為はむしろ正解であった。
生じた爆発が上の階の床を崩し、グールの上に落下する。

舞い上がる土煙が晴れたその時、目の前から落ちてきたのは床だけではなかった。
食い荒らされた人間の死体が散らばっていたのだ。
中途半端に喰われたものから、綺麗に食べられ白骨になったもの、さらに皮が剥ぎ取られ筋肉しかないもの……
その全てが生きていた人間とは思えない。
四人は言葉を失うしかなかったが、同時に裕紀の判断が無ければこの死体のようになっていたという事だ。
「行きましょう……」
柊の呟きに顔を青くした三人はラジオ局の奥に向かって歩いて行った……

プロジェクト・アンノウン

ラジオ局前
０８：５４

先程の内部の銃声に狼狽していた島達四人はラジオ局を見上げる。
ラジオ局の中で何が起きているか分からない事が最も彼等を苛立たせていた。
中で何があるか分からないばかりか、安否や敵の情報すら無いのだから無理も無い。
無線付きランクルに無線があるのだが、柊達は無線を携帯していない為、ただの四角い箱と同じだ。
見に行くにしても、入口を守る必要性があるのも事実であり、下手に動けない。
島は舌打ちをした……

アポカリプス内部
同時刻

W．C．U．の三社の一つ「ジークフリーデン」社長のケーニッヒはモニターに映るモノを見ながらニヤリと笑う。
モニターに映し出されたカプセルのような形の機械の中には薄い黄緑色の液体が充満しており、中には人影が見える。
「アドルフ。奴の調子はどうだ？」
不意の問い掛けに振り返ったケーニッヒにウィルコックが映った。

ウィルコックは無表情で歩み寄るとモニターを見つめる。
ケーニッヒはうっとりしたような口調で呟いた。
「プロジェクト・アンノウン……その産物はアビスと違って美しい」
「元は奴らと同じ存在だがな……ヘルフィアー教団とクトゥルフ、そして入谷謙介（いりやけんすけ）に感謝だな」
入谷謙介――初めてのアビス事件「富士樹海惨殺事件」の鎮圧に霞儚と参加した人物だ。
彼はＣＡＴＳ発足後に陸上自衛隊を退役し、アビスの研究所を発足させた。
彼は「横須賀消滅事件」の終結直後に「ヘルフィアー教団」に射殺される。
しかし、彼が残した仮説がクトゥルフ撃破の為のヒントとなった。
「入谷……奴はアビスの様々な遺伝子情報の手掛かりを残してくれたお陰で、全て出来たのだ。アビスの復活から、我々の最終兵器までな……」
「それは分かるけど、僕達がそれらを創らなきゃ、ホムンクルス兵も出来なかったし、アビスもアンノウンも出来なかった。違う？」
「舞い上がるな」
その一喝は不知火の物だった。
不知火も二人同様にモニターを見つめる。
「この施設を作ったのは我々不知火重工、アンノウンを管理する電算機を作ったのはウィルコック社。それらが無ければ、アンノウンは出来なかった」
不知火の言葉にケーニッヒはつまらなそうにモニターを見つめる。
「どちらにせよ、これは使わないだろう」
ウィルコックの呟きにケーニッヒはさらにつまらなそうにモニターを睨む。
「そろそろ、ポルトスをアメリカに出撃させようと思う」
「ポルトスにこれは積むのか？」
「いや、アポカリプスで輸送し、アトスを使って例の場所に輸送す

る」

「この進攻はプロジェクト・アンノウンの最後のピースだ。アンノウンが目覚め、我々の管理下に置かれた時、奴らの未来は無くなる」

ウィルコックはプロジェクト・アンノウンの産物を見つめ、不敵な笑みを漏らした。

帝都へ

ラジオ局内部「収録室」
０９：０３

ラジオ局に来た目的の本元である収録室の扉を開けた柊は近くにいたグールの頭を撃ち貫いた。
何かが砕け、弾ける音が響き渡る中、柊が「クリア」、つまり問題無いを意味する言葉を口にする。
９ｍｍ機関拳銃の弾倉を新たな弾倉に交換した柊の後ろに続き、裕紀達が中に入った。
ここまで来る過程で殺したグールは数知れない。
弾薬も尽きかけて、最上階の収録室にたどり着いたのは運が良かったとしか言えないが、結果が良ければ全て良しとしよう。
「如月さんは救援を要請をお願いします。私は機器を操作します」
「分かりました」
裕紀は８９式小銃の銃床を畳みながら収録室の中核となる音声収録の部屋の扉を開けた。
音声収録室はテレビで見るように机とマイクしかない。
独特の匂いが鼻を抜けたが、硝煙と血の匂いに比べたらずっとマシだ。
裕紀は柊を一瞥すると、手を差しだし、合図を出す。
「こちらは……」

ＵＨ－６０ＪＡ機内

同時刻

武器の最後のチェックを終えた翼は何気なくラジオを入れた。
テレビ等が無い状況で最も役に立つ機器であり、客観的な情報を手に入れられるものだ。
そのラジオの情報を聞こうとラジオを入れたその時、ラジオＤＪやニュースを伝える声ではなく、少年の声がノイズ混じりに聞こえてきた。
（こちら……ラジオ局……京にて……孤立……）
いきなりの事に情報が呑めなかった翼は慌ててチューニングを開始した。
（学生六名、自衛官二名が取り残され、自力での脱出は難しい。誰か聞こえていたら救助を要請してほしい）
「救援要請か……霞さん、どうする？」
翼の問い掛けに霞はすぐに「目的地は東京」と怒鳴った。
「救援要請を優先」
「了解」
全員が答えたその時、ミサイルアラートが鳴り響いた。
「掴まれ！！」
耕一の怒鳴り声に全員が反射的に手摺りに掴まる。
キャノピーからは白い白煙を噴き出し、こちらに向かってくる多数のミサイルが見えた。
小西は操縦桿を握り、ヘリコプターは急激に高度が下げていく。
その衝撃は凄まじく、体がフワリと浮き上がる。
殆ど飛行か墜落なのか分からない状況だ。
その時、左部ハッチがミサイルの爆風で吹き飛ぶ。
そこから流れ込む風は体を吸い込もうとする。
掃除機に吸い込まれる虫の気持ちが一瞬分かってしまった翼は一人自嘲したが、すぐに笑い事ではないと手摺りを握る力を強くした。
その時、望の絶叫が響き渡り、手摺りから離れて吸い出されて行く

自分の伴侶が目に映る。
「望！！」
翼は自分の置かれた状態を理解する余裕もなく手摺りを離し、望に向かって跳んだ。
その速度は尋常ではなく、ほんの一瞬の出来事だった。
望の手を掴み、素早く手摺りに指を掛けるが、指だけではかなり厳しい物がある。
吸い出される力と望の体重、そして自分を支えている命綱は四本の指。
手摺りをしっかり握ろうと思っても、丸い手摺りは滑り、逆に離れてしまう。
刹那、凄まじい爆風が望の真下で巻き起こり、爆風に煽られた翼の体が浮き上がり、手摺りから指が離れた。
真下を一瞥してしまってから吸い出されるよりも早く強い力が翼の腕を握る。
「……行くならパラシュートを付けろ、バカップル」
歯を食いしばりながら毒づくジェイクに笑みを漏らした。
「ああ……ちょっと妻と旅に出てみたくてな」
翼がそう言うと、ヘリが降下し、減速する。
「引き上げろ！」
耕一が叫びながら翼のもう片方の手を掴み、合図で引き上げた。
それを確認した小西は後ろを一瞥する。
「敵対空ミサイルの攻撃が激しい。ここからは歩いてほしい」
「いつもこうだな」
翼が苦笑するとヘリが広い公園に着陸し、土煙を巻き上げる。
刀を片手に掴んだ翼はヘリから飛び降り、９ｍｍ機関拳銃を持った望が続いた。
「久しぶりの空気だ……奴らの度肝を抜いてやるぞ、元三尉！」
「了解です、元二尉」
二人は同時に初弾を薬室に装填したのだった……

ポルトス

太平洋上空
０９：１４

アポカリプスの滑走路が並んだその下の部分がゆっくりと開く。
それはアメリカ軍のステルス爆撃機「Ｂ－２」のような曲線的なフォルムでエイのようにひらべったく、さらにエイの尾のように伸びた滑走路が特徴的で全長は５００メートル以上あった。
翼には垂直発射装置等と呼ばれる「Ｖｅｒｔｉｃａｌ　Ｌａｕｎｃｈｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ」通称「ＶＬＳ」が搭載されている。
ＶＬＳとはミサイルを垂直発射し、ミサイル発射機が敵を狙う為に回転する時間を短縮するという目的で作られた兵器だ。
有名な所ではイージス艦に搭載される対空ミサイル「ＥＳＳＭ」や垂直発射型対潜用魚雷「アスロック」等が挙げられる。
空中の航空母艦とも言える空中戦艦「ポルトス」はゆっくりと、確実にアメリカに向かって行った……

ＷＲＣＡＦ本部「老神島」
０９：２０

「報告！！アポカリプス内部から大型の機体が発進。アメリカに向かっています」
偵察衛星を見ていたオペレーターの声が会議室の中に響き渡り、モニターに映像が映し出された。

悠然と、まるで海原を泳ぐマンタのようだ。
「ＷＲＣＡＦ空軍にスクランブル！！」
米大統領の怒鳴り声と同時に瀬川も怒鳴る。
「ＫＣ－７６７及びＥ－７６７の準備を！急げ！！」
「ゴスペル隊、シリエジオ隊、ウルフ隊にスクランブル！！」
「空中給油機、及びＡＷＡＣＳ緊急発進！！」

不意に緊急を告げるアラームが鳴り響き、ゴスペル隊の隊員達が椅子から立ち上がった。
（アポカリプスから巨大航空機発進。ゴスペル隊、シリエジオ隊、ウルフ隊にスクランブル）
「やっと来たか」
メイトリクスは指を鳴らすと立ち上がる。
「気負い過ぎて墜ちないで下さい」
リューベックは毒づくと逃げるように格納庫に向かう。
「あのウォッカ野郎……」
メイトリクスは面白くなさそう呟き、格納庫に走っていく。
その後ろに佐伯達が続き、格納庫に向かう。
格納庫の中は整備士達が慌ただしく走り回り、戦闘機の整備をしている。
対空任務という事で取り付けられた武装は短距離空対空ミサイルと中距離空対空ミサイルだ。
前回のような事が無いようにという理由でシリエジオ隊の「Ｆ－１６Ｃ　ファイティングファルコン」にはロケット弾が武装として与えられた。
ロケット弾なら誘導妨害といった事も無く、低速で飛行する敵空母

機なら楽に当てられるだろう。
もっとも１９５０年代には対爆撃機の主兵装として用いられ、兵装をロケット弾のみとした機体が開発されていた。
しかし、爆撃機の高速化が進むと撃っても当たらないという事態に陥り、１９６０年代に廃止され、対地攻撃用に用いられるようになったのは有名な話だ。
それを再び空対空ロケット弾として用いるのは愚の骨頂とも言える。
だが、有効な打開策が見付からない以上、可能性は一つずつ試すしかないのも事実だ。
佐伯はヘルメットを被ると、愛機に乗り込む。
今回の戦力は１５機。
ゴスペル隊が佐伯のＦ－１５ＪＡ、瀬上のＦ－１５Ｊ、リューベックのＳｕ－３３、リーゼのトーネード、メイトリクスのＦ－１８Ｅの計５機。
シリエジオ隊は「Ｆ－１６Ｃ　ファイティングファルコン」が計５機。
ウルフ隊はユーロファイター「タイフーン」が計５機。
１５機の戦闘機でその航空母艦を撃破する手筈だ。
佐伯はサベージイーグルを滑走路まで移動させると深く深呼吸した。
やってやるさ……

それぞれの戦い

東京都某所
０９：３１

「部隊を二つに分けよう。桐生二尉……そうか、桐生は二人いたか」
耕一が望を一瞥すると、望は笑みを見せた。
「私の事は旧姓の椎名で呼んでください」
「分かった。桐生二尉、それでいいかな？」
「えぇ、構いません。元部隊の隊員で組みましょうか？」
「そうだな」
その時、向こうからエンジンの音が聞こえ、全員が反射的に銃を構えたがすぐにそれを下ろした。
迷彩服に糸目、柔和な顔立ちの男性が陸上自衛隊の偵察用オートバイが向かってくる。
「兄貴！！お久しぶりっス」
大野はＳＲ－２５を背負いながら向かってくる。
翼は苦笑すると「やっぱり来たか、あの馬鹿」と呟く。
「自分はここを守ります。万が一の時は無線連絡をお願いします」
小西は９ｍｍ機関拳銃を掴みながら言い、翼と耕一に携帯型無線を手渡す。
「僕達は東ルート、桐生二尉は西から迂闊してラジオ局に向かう。それでいいかい？」
「了解だ。望、ジェイク、大野、行くぞ！」
「「了解！！」」
三人が答えると、翼は先陣を切って駆けて行く。
「よし、僕達も行こうか？」
様々な銃の良い所を組み合わせて作られた突撃銃「ブッシュマスターＡＣＲ」を構えた耕一が駆けて行き、その後ろを狙撃銃「ＰＳＧ

－１」を簡素化し、軽量化して重量を減らした狙撃銃「ＭＳＧ９０Ａ１」を持った和葉、精度が高い事で警察等でも使われるサブマシンガン「ＭＰ－５」系列のコンパクトモデル「ＭＰ－５Ｋ」を持つ霞が追従する。
新生「ＣＡＴＳ」の戦いが始まった……

太平洋上空
同時刻

広がる海原を眼下にし、１５機の戦闘機が空中給油を受けていた。
（トイレの順番待ちと表現するのが良く分かるぜ）
メイトリクスの声が無線から聞こえ、佐伯は思わず吹き出してしまう。
（そういう下らないジョークはやめてくれないかな？）
すかさずリューベックが毒づくとリーゼが（五月蝿い奴らだ）と呟く。
最悪のチームワークだと佐伯は嘆息を漏らす。
（全部隊に通達）
ＡＷＡＣＳの声が聞こえ、全員が無線に耳を傾けた。
（敵機はレーダーに映らない。我々は人工衛星を用いてリアルタイムで指示を出す。目的は敵大型航空機。作戦名は「ストーム」）
嵐と銘打たれた作戦は単純だが「ホーネットネスト」がそうだったようにどんな武器を使ってくるか分からないのが実状だ。
敵航空機は緯度１５５°、経度３６°の地点にいる。
交戦までそう無い。
補給を終えた佐伯はサベージイーグルを編隊の中に戻し、他の４機

が編隊に加わった。
「ゴスペル隊はこれより敵とのエンゲージに備えて高度、速度を維持する」
（ゴスペル2、了解です）
（ゴスペル3、命令を実行する）
（ゴスペル4、そのつもりだ）
（ゴスペル5、分かってるぜ）
五人は遠くの空に映る大型の航空機を見据えた……

英雄達の戦い

東京都某所「西ルート」
０９：３５

ヘリに似た外見の兵器が頭上を通過していく。
翼達四人は壊れかけた家に隠れてやり過ごしを繰り返していた。
満足な火器が無い以上当然だが……
「大野は奴らと交戦したらしいな？どうだった？」
「奴らは基本的にはレーザー兵器やレールガンを使っていたっス」
「よくもまあ、そんなＳＦチックな兵器を持ち出した物だ」
翼が苦笑すると、ビルの上で何かが光った。
スナイパーライフルのスコープが反射するような、そんな光だ。
「敵だ！！」
翼が叫んだ刹那、ビルから装甲服に身を包んだ戦闘員達が現れ、乱射してくる。
ジェイクは素早く三人の中央に立つと、印を結んで地面を叩いた。
同時に薄い緑色の結界が周囲を包み込み、レーザーを遮る。
ビルの両側からの射撃の為逃げ場はなく、一歩遅かったら間違いなく死んでいた。
「待ち伏せか」
翼は小さく呟くと、結界から飛び出した。
赤い閃光が飛び交う中を駆けて行き、ビルの中に滑り込む。
「左のビルは何とかする！」
「了解です」
望は答えると、結界の中から手首だけを出して攻撃し、大野もビルの上の敵に対して攻撃を加える。
それを確認した翼は階段を駆け上がって行く。
ここでの戦闘が長引けば、敵は必然的に増援を送り込んでくる。

さらに挟撃による奇襲となればこちら側の撃破に時間が掛かるのは必至。
だが、しかし、ビルによる挟撃は一つだけ弱点がある。
逃げ場が無い事だ。
敵が一旦ビルの中に入れば、逃げる場所が無い閉所においての防衛を余儀なくされる。
つまり、ビルに入るだけで敵の挟撃を止められるという事に繋がるのだ。
無論、それは両刃の剣。
こちらも引くに引けないのが現状だ。
ここで左右されるのは実力となってくる。
翼は雷電と黒羽を上に構えると階段から飛び出した。
人影は無い。
（待ち伏せか？）
翼が内心呟くと向こう側の壁から少し人影が見えた。
やはり待ち伏せのようだ。
恐らく中に入ってから仕留めるつもりだったらしい。
翼は黒羽を構えると、待ち伏せをしているだろう壁に向けて引き金を引いた。
「ＦＮ　ＦＩＶＥ－ＳＥＶＥＮ」を改造した「黒羽」が使用する５．７ｍｍ弾は所謂ライフル弾だ。
本来はＦＮ　Ｐ９０と言われるライフル弾を使うサブマシンガン用の弾薬だが、ＦＩＶＥ－ＳＥＶＥＮはＰ９０との弾薬の互換性を持たせる為に開発され、ライフル弾を使う。
ライフル弾は防弾チョッキを貫通する威力がある為、壁を貫通させるには十分だった。
壁を貫通した弾丸は待ち伏せしていた戦闘員の体を撃ち抜き、撃破する。
同時に翼はその中に走った。
それに合わせるかの如く、戦闘員が銃を構えるが翼の予想外の突進

に狼狽する。
恐らく戦闘員は一体倒して翼が安心すると思い、悠長に構えていたのだろう。
翼は足から滑り込みつつ、二丁拳銃を乱射する。
体を弾丸で揉まれ、止めに足をスライディングで弾かれた。
まだ部屋にいた二人の隊員も滑り込んでくる翼に狼狽する。
窓際にいた二人の隊員は、雷電を撃ち込まれた一人は勢いで窓から叩き落とされ、黒羽を撃ち込まれたもう一人眉間のヘルメットを撃ち抜かれた。
翼は素早く立ち上がると、隣の部屋を一瞥する。
流石にここまで来ると戦闘員も反撃を示す。
素早く壁に隠れた翼は二丁拳銃を仕舞い、刀「鬼首」を引き抜いた。
緋色の刀身の反射で向こう側を確認した翼は、身を低くして部屋に突入する。
頭上を飛び交うレーザーをかい潜り、翼は鬼首を横に一閃した。
ヒュンという鋭い音が響き、戦闘員の体が横に真っ二つになる。
続いて後ろにいた戦闘員に対し、刀を逆手に持ち直して振り返らずに突き刺す。
蛙を踏み潰した時のような、短い悲鳴が響き渡り、刀の先端が壁に突き刺さる。
同時に最後の一人が短いレーザー光が出たナイフを持って駆けてきた。
確実に殺すつもりだと理解したが、拳銃を抜く余裕は無い。
「うおぉ！！」
戦闘員の雄叫びは明らかに仕留めたと核心し、余裕がある。
「甘いぜ！！」
翼は左腕に隠していたデリンジャー「ＣＯＰ．３５７マグナム」の改造武器「霧積」を構え、引き金を引いた。
通常四つの銃口から．３５７マグナム弾が発射されるマグナムを同時発射に改造した代物だ。

四発同時発射で撃ち込まれたマグナム弾は敵の装甲服に食い込み、吹き飛ばした。
壁に叩き付けられ、ぐったりとした戦闘員を見た翼は刀を引き抜く。
「クリア！！」
翼は大声で怒鳴ると、望達も敵を殲滅したようだった。
翼は刀を持ちながら、階段に向かって歩くと、不意に刀で後ろを切り付ける。
ナイフを振りかぶったまま止まる戦闘員。
それを一瞥した翼は刀を鞘に納め、歩いて行き、階段までたどり着くと先程の部屋から物が落ちる音が聞こえてきたのだった……

ストーム

太平洋上空
０９：４２

遠くに見える巨大な戦闘機を見据えた三個編隊はアフターバーナーを点火した。
敵の後部に有るのは恐らく滑走路だ。
そこから、「ホーネットネスト」において煮え湯を飲まされた戦闘機、コードネーム「シリアルキラー」が発進する可能性がある為、勝負は一瞬。
敵のレーダーにはこちらが丸見えだろう。
しかし、攻撃してこないという事は好機には違いない。
敵航空機はゆっくりと、まるで悠然と泳ぐ鯨のように空を飛行している。
敵との距離は約１０ｋｍ。
だが、音速の世界では１０ｋｍは一瞬だ。
ＨＵＤにターゲットを捉えた佐伯は「ＦＯＸ２」と叫び、二発のミサイルを発射。
同時に他の戦闘機からもミサイルやロケットが撃ち込まれる。
ミサイルの煙が空に橋を掛けたその時、敵大型航空機から多数のレーザーが放たれ、ミサイルを次々たたき落としていく。
レーザー版のＣＩＷＳといった兵器だろう。
レーザーはミサイルとロケットを撃ち落とすと戦闘機に狙いを定め、１機のＦ－１６がレーザーによって撃ち落とされ爆発する。
「くそ！！」
佐伯に合わせて寮機が敵大型航空機から離れる。
青いレーザーがこちらに追い縋り、キャノピーの横を掠めた。
（物騒な物を撃ってきやがって！！）

ＴＡＣネーム「ケルベロス」のメイトリクスが吠えると同時に滑走路から多数の敵性戦闘機「シリアルキラー」が発進してくる。
「全機ブレイク！！固まってたら一網打尽にされるぞ！」
（（ウィルコ！！））
全員が叫ぶと、早くもタイフーンがレールガンで撃墜された。
サベージイーグルのキャノピーの右を見るとシリアルキラーが銃身を光らせている。
サベージイーグルは素早く上昇すると、シリアルキラーの放った弾丸がすぐ下を掠めていき、振動が伝わってきた。
佐伯はサベージイーグルを水平に保つとシリアルキラーの後ろに張り付く。
しかし、不意にシリアルキラーはヘリのように反転した。
反射的に操縦桿を右に倒したその時、シリアルキラーはサベージイーグルの上に回り込みながらレールガンを発射する。
条件反射で操縦桿を切っていた為、レールガンから放たれた弾丸は辛うじてサベージイーグルに当たらなかった。
今日は運がいいなと苦笑いを浮かべたが、すぐに運で生き残れる程戦場は甘くないと思い直し、笑みを消す。
シリアルキラーはサベージイーグルの後ろに張り付きながら向かってくるが、単調な動きで追い掛けてくる先程のシリアルキラーを敵では無いと見なした佐伯は戦闘機をエンジンの加速と減速を上手く使い、宙返りをし、再び後ろを奪った。
即座に先程の二の舞を繰り返さないように、サベージイーグルは機関砲を発射する。
機関砲から放たれる弾丸はシリアルキラーのエンジンを破壊し、叩き落とした。
その時だ。
無線に割り込む声が響き渡った。
（へぇ……中々出来るのがいるんじゃん）
「誰だ！？」

（僕はＷ．Ｃ．Ｕ．パイロット、クーガー。君は？）
一瞬名乗るか考えた佐伯だったが、すぐに口を開く。
「自分はＷＲＣＡＦ空軍、第７航空団７７飛行隊、ゴスペル隊一番機、佐伯一等空尉」
（日本人か……不思議な機体だ……まるで僕のオルカのようだ。滑走路を見て御覧よ。今、僕がいるよ？）
その声に佐伯は反射的に滑走路を見ると、黒い戦闘機があった。
ロッキード社が開発した超音速偵察機「ＳＲ－７１　ブラックバード」に「Ｓｕ－４７　ベールクト」の前進翼とカナード翼を搭載したような形の戦闘機が確認出来る。
機体にはマウスシャークのペイントがあり、その黒い外見からサメというよりはシャチ（オルカ）を彷彿とさせた。
その戦闘機は滑走路から飛び立つと機首をサベージイーグルに向ける。
（一騎打ちをしようよ）
クーガーと名乗る男の声が聞こえてきたその時、サベージイーグルにレーザーが撃ち込まれ、機体の横に穴を開けた。
サベージイーグルは素早く上昇するが、オルカもくっついてくる。
シリアルキラーに比べたら戦闘機らしい動きだが、その機動力と加速力は尋常じゃなく桁違いだ。
（ブリッツ！援護に向かいます！！）
「構わない、ヴァルキリー。そちらは敵大型航空機に集中しろ」
同時に凄まじい衝撃が機体を突き抜けた。
また、レーザーが直撃したのだ。
これ以上は持たない。
（逃げるだけ？つまらないや……）
こいつ、楽しんでやがる。
佐伯は舌打ちすると機首を垂直に向け、アフターバーナーを点火した。
（逃がさないよ）

オルカもアフターバーナーを点火し、追い縋り、お互いが音速の世界に突入する。
後ろから青いレーザーが飛んでくるが、佐伯は気にせず上昇した。
その時、サベージイーグルは不意に減速し、オルカが前に飛び出す。
オーバーシュートだ。
アフターバーナーで追い掛けているうちに、追い掛ける側が前に飛び出してしまう事で、空戦では合っては成らない事だ。
サベージイーグルは狙い済ましたようにオルカの後ろに機関砲を叩き込む。
オルカからは火花が飛び散るが、機体を素早く立て直す。
（へぇ……やるね、君の機体）
「サベージ……サベージイーグルだ」
（サベージイーグル……獰猛な鷲かぁ……海のギャングと空のハンター、どっちが強いか勝負だね）
クーガーの笑い声が響き渡り、サベージイーグルとオルカはお互いに機首を向け、アフターバーナーを点火しながら突進した。
オルカはレーザーを、サベージイーグルは機関砲を発射しながら向かって行く。
お互いの攻撃が当たらずに二機は擦れ違う。
すかさず先に反転したサベージイーグルは後ろを向くオルカをロックする。
甘いな……
「ＦＯＸ３！！」
サベージイーグルからミサイルが放たれ、オルカに真っ直ぐ伸びて行く。
同時にオルカはアフターバーナーを吹かした。
通常、ミサイルに追尾されている時にアフターバーナーを吹かさないのが原則だ。
「コイツ、素人か？」
佐伯が小さく呟くとそれは違うという事に気が付いた。

オルカがミサイルを突き放し、凄まじい速さで向こうに行くのだ。
追い付けなくなったミサイルは空中で爆散し、炎を見せる。
（今度はこっちからだよ）
クーガーの声が聞こえたその時、オルカは反転したかと思うと、その機体から何かが出て来た。
機体上部と下部にそれぞれ二個、計四個の箱のような物だ。
同時に、箱から多数の噴煙が吹き出し、多数の超小型のミサイルが一斉にこちらに向かってくる。
大きさは約１０ｃｍのそのミサイルは害敵に襲い掛かる蜂のようだ。
サベージイーグルを包み込むように展開したミサイルは一斉にサベージイーグルに向かう。
「クソッタレ！」
佐伯は毒づくと機体を降下させて海面スレスレを飛行する。
サベージイーグルの速度で舞い上がる水しぶきがキャノピーを叩いた。
同時に多数のミサイルが上空からサベージイーグルに向かって急降下する。
サベージイーグルは海面に触れないように気をつけながら左右に動き、ミサイルを回避した。
ミサイルは海中に入ると爆発し、海水を沸騰させながら水柱をあげる。
その時、瀬上の声が無線から聞こえてきた。
（ゴスペル１、こちらゴスペル２。全部隊残弾無し）
ここまでか？
佐伯が最後のミサイルを回避したその時、クーガーの声が聞こえてきた。
（なら、今回はこれまでだ。僕も、君の実力を把握出来たから……いいよ、行って）
どういう事だ？
佐伯が訝しげに眉を潜めたその時、クーガーは付け加える。

（僕にとって戦争は遊び。だけど、君達が遊べないなら意味ないじゃないか）

その声に佐伯は嘆息を漏らすと、「撤退する」と呟いた……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6191w/

アビス?:PROJECT・UNKNOWN

2011年10月13日08時08分発行